

---

# Jolly Rogerに杯を掲げよ

早瀬黒絵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Jolly Roger に杯を掲げよ

### 【Nコード】

N6449T

### 【作者名】

早瀬黒絵

### 【あらすじ】

「ペットですか?」「人形は船員にはなれねエからな。」「それもそうですね。気付いたら見知らぬ場所いて、何故かうさぎの又イグルミの中に入ってしまったっていました。そんな私を買ってくださいったのは海賊でしたが、私はどうやら船長さんのペットになったようなのです。天然マイペースなですます口調の外見又イグルミな女の子と、そんな女の子を買った気紛れな海賊船長のお話。(この小説は自サイトでも公開しております。)

いち。

‘理不尽’という言葉が辞書で引いたことかありますでしょうか？

物事の筋道が立たないこと。道理に合わないこと。

とりあえずそんな感じの内容が出てくると思います。

何故いきなりこんなことを言い出すのかって思うかもしれませんが。

だけど、こんな状況に陥ったら誰だって‘理不尽’という言葉を出すでしょう。

「今回の目玉商品は何と言っても此れ！！」

バツと音を立てて檻にかけられていた布が外されたます。

檻越しに大勢の人々が私を見えています。勿論、檻の中にいるのは私

の方ですね。

ぼんやりと座って観客を眺めていれば脇に立っていた初老の男性が私の首に繋がっている鎖を引っ張りました。

「何でも良いから動いて喋れ！」そんなことを言われましてもこんな狭い檻の中で何をして、何を話せと言うのでしょうか。

見上げた先にあつた初老の男性の目は異様にギラギラとして私を見ています。

仕舞いには言う事を聞かないと切り刻んでやるとまで脅されてしまひまして、仕方なく檻の中で立ち上がって観客へ顔を向けました。

それだけで観客はざわめき立ちます。あまりジッと見られると恥かしいのです。

「…こんにちは。初めまして。」

たったそれだけしか言っていないのに観客は総立ちで私を見ようとするものですから、ステージと客席を隔てる柵は今にも倒れてしまひそうなのです。

初老の男性は観客席へ向かって叫びました。

「いかがです？動いて喋る愛らしいヌイグルミ！中身は人間、な  
に体はヌイグルミという不思議な存在！！こんなもの滅多にいませ  
んよ？五千万ゼアから、さあさあ買った買った！！！」

そう、私は今人身売買の会場にいます。それも何故かうさぎのヌイ  
グルミという姿で、です。

普通に学校から帰ろうとしていたのに気が付いたら古臭い路地っば  
い所において、それも子どもが喜びそうな可愛らしい真っ白のもふも  
ふフワフワなヌイグルミ。

自分の体でなければとても可愛いのです。

訳が分からずウロウロしていたせいで捕獲されてしまったのですね。  
大失態です。

…私はどうしてこうボンヤリさんなのでしょう？

六千万、七千万と跳ね上がっていく売値を聞きながら今後どうする  
べきか思案していると、不意によく通る声が会場に響き渡りました。

「 ……一億だ。」

どよつと一際ざわめいた観客が揃って声のした方向へ顔を向けます。私もそれに倣って檻の鉄格子の隙間から声の主を見ました。男の方です。

大勢の観客の注目を浴びても物怖じせず、堂々と歩いて来た男性は近くで見るとかなりイケメンさんで、頭に巻かれた布はどこかアジアンっぽいのです。

深い青色の髪に黄金色の鋭い瞳のそのイケメンさんは一度私を見て、それから背後にいた数人をチラリと見て、初老の男性へ顎で示します。

数人のうちの一人でガタイの良いお兄さんが持っていたケースのよなものをドン！とステージに下ろしました。とても重そうな音です。

初老の男性がケースを開けると中にはギッシリ詰まった札束のようなもの。

…初めて大量の札束というものを見ました。

驚いて見ていると初老の男は愛想良く笑って「一億以上はいませんね？では商談成立！」と声高らかに言い、私の入った檻の鍵をお兄さんに手渡しました。

お兄さんはアツサリ檻の鍵を開けると私を持ち上げます。

乱暴に扱われるのではと思いましたが、予想より丁寧に檻から出され、抱っこしてくれました。

先に言っておきますがイケメンさんは綺麗系の美形さんで、お兄さんは髪を編み込んでサングラスをかけたレゲエのような男らしい美形さん。

：レゲエさんがうさぎのヌイグルミを抱えてる図ってとっても変じやありませんか？

誰もそのことに突っ込まないのが不思議です。何とも思っていないのでしょうか。

首の鎖は付けられたまま私はお兄さんに抱っこされて人身売買会場を出ました。

外はお世辞にも綺麗とは言えませんが、ヨーロッパ調っぽい建物が広がる大通りには屋台がひしめき合い、物を売っていたり、何かを作っていたりと様々な人々がいます。

「おい。」

ドレス姿で目の前を横切って行った女性を追いかけて見つめていると首がグイと横に引かれました。

顔をそちらへ向けるとイケメンさんが私の首に繋がる鎖を持って見下ろしてきます。

「なんでしょうか？」

首を傾げて返事を返すと私を持っているお兄さんが「キャーッ、可愛いつ！！」と頬をすり寄せて来ました。

え、お兄さんはその姿でまさかのおネエ言葉を駆使しちゃう方なのですか？

ちよつとしたシヨックを受けながらもイケメンさんの視線を見つめ返していると、イケメンさんはニヤリと悪い笑みを浮かべます。

カッコイイ人はどんな表情をしてもカッコイイのですね。

「お前、俺が誰だか分かるか？」

いいえ。全く以って分かりません。首を横に振って素直に返事を返します。

するとイケメンさんは殊更愉しそつに目を細めて私をお兄さんの腕の中から奪い取りました。

さっきまでは何も反応を示さなかったイケメンさんの後ろにいる人



々が、ギョツとした表情で私とイケメンさんを見ます。

お兄さんに至っては私を返せとイケメンさんに文句を言っています。  
イケメンさんはそれら全てを完璧スルーして私の首から鎖を外してくださいました。

「俺の名はヴェルノ＝ウルフガング。…海賊だ。」

「アタシはアイヴィー＝クウォーク、ヴェルノは船長でアタシは副船長なのよお。」

イケメンさんはヴェルノさん、お兄さんはアイヴィーさん。

アイヴィーさんは語尾にハートがついてそんな様子ですね。

頭を撫でられながら「可愛いうさぎちゃんの名前はあ？」と問われたので答えます。

「真白ましろといます。」

「あらあ、見た目通りの名前なのね。」

「あ、そうなりますね。気付きませんでした。」

今の体は真っ白なヌイグルミなので真白という名前は見たまんま。

でも、元々の名前なので変えようもありません。

私はヴェルノさんに抱えられたまま街を後にしました。

に。

ヴェルノさんの海賊船に着くと、船に乗っていた方々が全員茫然とした様子で船長である彼の腕の中にいる私を凝視しました。

もし私があなた方の立場でしたら同じ行動をしていたと思います。

イケメンな方がうさぎのヌイグルミを抱えて戻ってきては驚きますよね。それも海賊船長ではなおさらです。驚かれるのも無理はありません。

縄梯子を片腕でヒョイヒョイと上がって行くなんて流石海賊です。私には到底真似できない腕力と俊敏さです。

船の甲板に下ろされ、漸く私の足は地面を踏むことができました。

ちょっと揺れている気がしますですが慣れれば問題ないかと思われませう。自分の頭から横に立つヴェルノさんの足へ水平に手を動かしてみると腰よりも低く、膝よりはやや高い。…一応耳の一番長い部分で測ってみたのですが。

「何してんだ。」

呆れたような表情で見下ろされてしまいました。

「私ってとっても小さいですね。」

「人形だからな。」

せっかく歩けると思ったのに、またヒョイと抱き上げられてしまいます。

真上にはアイヴィーさんの顔。

頭の上にスリスリと顔を寄せられます。この体でも感覚はあるようで、頭の上に温かな感触がありました。

ぶらんと手足が宙に浮いている状態で少々不安定な体勢のまま動かない私を船員の一人が指差しました。

「船長、何ですかコレ！」

人を指差してはいけないのですよ。

…又イグルミの場合は良いんでしょうか？

「俺のペットだ。」

「ペットですか？」

「人形は船員にはなれねエからな。」

それもそうですね。濡れてふにふにようになって、使い物にならないようになってしまいそうです。

潮風にさらされたらカピカピになりそうですし。

何はともあれ御挨拶というものは大事なのです。

「はじめまして、真白といいます。ヴェルノさんに買われたうさぎの又イグルミです。役に立たないかもしれませんがお世話になりますので、よろしく願います。」

ぺこりと頭を下げると意外にも「あ、ああ」とか「お、おう」とか戸惑いながらも返事を返してくれました。

海賊とは言っても実は皆さん優しい方々なのかもしれませぬね。

船員さん方も気になりましたが私はアイヴィーさんに抱えられて船内へと足を踏み入れました。

やはり暗いです。足元というか、廊下の角とか隅っこが見えませぬ。

アイヴィーさんに船内を一人で歩かないよう注意されます。

何故ですかと聞くと、とても良い笑顔で

「こんなに暗いと蹴られたり踏まれちゃうでしょ？」

と言われました。確かにその可能性は高いです。

思わず頷いた私にアイヴィーさんは声を上げて笑いました。

入り組んだ廊下や階段を進むと、大きな扉の部屋があって、先を歩いていたヴェルノさんがその扉を開けました。

暗さに慣れた視界に明るく柔らかな日の光が眩し過ぎて目が開けられませぬ。

何度か目をシパシパさせているとまた可愛いと頭を撫でくり回されます。

ヴェルノさんは地図や本、様々宝石などが置かれた部屋の中央にある大きな椅子に腰掛け、私はその目の前にある大きな机の上に乗せられました。

アイヴィーさんは部屋を出て行ってしまいます。

…自分の身長よりも高い机では飛び降りるのは怖いですね。

金の瞳にジツと見つめられたので、私はヴェルノさんの目の前に失礼ながら座らせていただきました。

どうやら正解だったらしく、少し骨張って傷跡なんかが残る手が私の手を掴んで、何やら触り心地を確かめているようで。

私としては触られている感覚はありますが、それだけなのです。

「お前、元は人か？」

唐突な問いでしたが、はいと強く頷くとどうして人形になったんだと聞かれました。

答えられるのならば答えたいのですが、残念なことに私の中にその答えはありません。

分かりませんと言うとそうかと短く返されます。

あなたが何を求めているのか私には測り知ることは出来ません。

「私はこの船で何をすればいいのでしょうか？」

ヌイグルミでは皿を洗うことも洗濯をすることも出来ないかもしれない。せいぜい軽い荷物を運ぶかお掃除くらいしか思い浮かばないのです。

でもヴェルノさんの言葉は予想外でした。

何もする必要はねエ。

それでは何のために私を買ったのでしょうか？思わず私は聞き返してしまいました。

「珍しいもんを手元に置いておきてエと思ったただけだ。」

「では私の仕事はヴェルノさんのお傍にいますね。」

「そうなるな。」



ヴェルノさんは私を見つめ、一言「お前が女じゃねエのが惜しいな、ポツリと呟きます。」

一応女ではありますが。そう言うとヌイグルミじゃ抱けないし、そんな気も起きないと言われました。

成る程そういう意味でしたか。ヌイグルミ相手ではどうしようもありませんね。

「申し訳ありませんが、私の体では抱き枕くらいにしかなれません。」

「まあ、クッションくらいにはなるだろ。」

この船の中で私の仕事は二つできました。

いち、船長であるヴェルノさんの傍にること。

に、抱き枕もしくはクッション代わりにすること。

人間の体であれば少なからずドキドキする状況なのですが、いかにせんヌイグルミの体ではドキドキどころか心音すらしていないので少女漫画的展開は望めません。

ヴェルノさんは机の上に乗った沢山の宝物の中から何かを取り出すと、指で来いと示されました。

どこまで行けば良いのかわかりませんでしたので目の前まで近寄ってみることに。

首元で何やらゴソゴソと手を動かした後満足げな顔で見下ろされました。

わん。

丁度タイミング良く扉がノックされ、入って来たのはアイヴィーさん。私を見て黄色い声　で、いいのでしょうか　を上げて抱きついてきます。

「いやーん！すっごく似合ってるわ〜！！可愛い！！」

ほらと鏡を前に置いてもらえると、真っ白なヌイグルミの首元には蝶々結びされた黒と白のストライプリボン。リボンの中央には青い大きめの宝石が輝いていました。

鏡の中から見つめてくるうさぎのヌイグルミは赤い目で見つめ返してきます。

花の模様が薄っすら描かれた白いワンピース姿のうさぎは私ですね。初めてヌイグルミの全貌を見ることができました。

振り返るとヴェルノさんとバッチリ目が合います。

「こんな高価な物、いただいていいのですか？」

「ああ。どうせ奪ったモンだ。」

海賊というものはもしかすると下手に働くよりお金になるのかもしれません。

大切にしなければいけませんね。

首輪のようにも見えますが、せつかくの好意を無碍にする訳にもいきませんし、光り物は大好きです。

アイヴィーさんは何やら数枚の紙をヴェルノさんに渡して難しいお話を始めてしまいました。

二人ともとても真剣な表情なので私は黙って待機するとしましよう。

机に端にぺたんと座って傍の宝物の小山をしげしげと眺めて待ちます。どれもキラキラしていて綺麗なのです。

一番近くにあった腕輪を拝借させていただいて着けてみましたが、やっぱりヌイグルミの腕には大きすぎてダメですね。大きな宝石を中心に透明で小さめな宝石がいくつも絡み合っただけの腕輪は少々重さがあります。

一体どれほどの価値があるのでしょうか？

する事ありませんので一緒に置いてあった少し汚れた布で腕輪を磨きます。多分この布は宝物を磨くための布なのです。

地味な作業ですがやり出すと楽しくて腕輪だけでなく傍にあった小山の物を丁寧に拭いてしまいました。

何かが綺麗になるという事はとても清々しい気持ちになります。

又イグルミなので汗なんて出ませんが、額を拭ってしまうのはクセですね。

結構な時間をかけて拭き終わるとポンと頭に手が乗ってきました。見上げるとヴェルノさんが可笑しそうに笑っています。

「随分熱心だったな。」

何せ光り物は大好きですから。

何時の間にはアイヴィーさんはいなくなっていました。何時の間に。

私は一仕事終えた心地よさに机の上に寝転がってしまうことにしました。又イグルミでは行儀が悪いとか、はしたないなんてないですよっし。

耳がカサリと何かに乗ってしまいました。

起き上がると先程アイヴィーさんが置いていった紙のようで、同じ大きさの何枚かの紙には何やら色々線やら文字が書かれてあります。

…これはもしかしなくとも地図なのでしょうか。

文字や線を見ながら机の上に並べてみるとパズルのようでちょっと面白いのです。

随分変な形の島が現れました。片方は真っ平らなのですがもう反対側はリアス式海岸によく似た所がいくつもあります。…まるで一つの島が半分に裂けたようなのです。

丸いヌイグルミの手でなぞってみたりなんかしていましたらヴェルノさんに汚れるからと取り上げられてしまいました。

もう少し見ていたかったのに残念です。

ヴェルノさんが懐から出した銃を掃除し始めたので今度はそちらを見学することにしました。

現代のようにマガジンを入れるタイプではなく、古いリボルバータイプで丁寧に汚れを拭いたりシリンダー部分を確認したりと忙しいそうです。

転がされていた弾丸は丸い先端をしています。

船の揺れで机から転がり落ちそうになっていたのでワンピースのス

カート部分に入れて安全確保。弾丸を入れる時に手渡ししましたら何してんだと苦笑されてしまいました。

銃の手入れを済ませてしまおうと用事はなくなってしまったらしくヴエルノさんは椅子から立ち上がります。

意を決して机から飛び降りようとした私に気付いてくださって、抱えてもらいました。

歩きたいなと思ったのは秘密です。

どちらにせよ私の今の身長では扉のドアノブまで手が届きませんかから部屋を出ることもできませんし。

薄暗い廊下を歩いていきますと船員さん方が何人が掃除をしたり洗濯をしたりと忙しそうにしている、少し申し訳ない思いを感じます。役立たずなヌイグルミの体が恨めしい。

甲板へ出た私は目が点になりました。

だって三百六十度全てが青いのです。

何時の間に出航したのでしょう？

明るい空の青と濃い海の青、海独特の磯の香りが全身を包み込みます。こんな広大な海の風景を見たのは初めてでしたので私の口は開きっぱなしなのです。

…このヌイグルミでは口は見えませんが。

ヴェルノさんは船首の縁で海を眺めます。私も縁に乗りたかったのですが落ちては一大事なので置いてありました木箱の上に座ることにしました。そうすると丁度縁から頭だけ出るので安心して海を見ることが出来るのです。

でも又イグルミというものはとても不便です。

ちょっと大きな波が来て船体がグラリと傾くと頭でつかちなこの体は、勢いに耐え切れずコロンと転がってしまうのです。

箱から落ちた私をチラリと見て「苦労してるな。」なんて言うヴェルノさんでしたが、そう思うのでしたら箱の上に戻るのを手伝って欲しかったです。

優しいかと思えば船長さんはちょっと意地悪でした。

漸く箱の上に戻ると綺麗なカモメさんが丁度船の縁にとまります。黒い瞳がキョートです。

ジツと見つめていたらカモメさんが突然口を開きました。

【あんな変な姿をしているね。】

ビックリです。まさかカモメさんの言葉が分かるとは。



「又イグルミですから。」

【ぬいぐるみ？それって人間の子どもが持っているやつかい？】

「はい。中身は人間ですけど、体は又イグルミなんです。」

【へえ！不思議だねえ。】

どうやらお話好きなカモメさんは本当に不思議そうに首を傾げて私の手を嘴で軽く突付きます。

カモメさんの翼を撫でさせてもらっていますとヴェルノさんが私とカモメさんの様子を見ている事に気が付きました。

「誰と話してるんだ。」

「カモメさんです。」

「…分かるのか？」

「はい。何故だか普通にお話できるようです。」

ヴェルノさんはカモメさんを見ました。

カモメさんは空を見上げると【あら、】と首を傾げます。

どうしたんですかと尋ねましたらもうすぐ嵐が来そうだと教えてくれました。でも空は気持ち良いくらい快晴なのです。

またねと言って飛んで行ってしまったカモメさんを見送ってから私もヴェルノさんへ嵐の報告を。

「これから嵐が来るかもしれないそうです。」

「あのカモメが言ってたのか？」

「はい。」

ヴェルノさんは少し考えた後、傍を通りかかった船員さんに嵐が着た時のための準備をしておくようにと声をかけました。

信じてもらえたようで嬉しく思います。

よん。

バタバタと慌ただしい足音が部屋の外から聞こえてきます。

出来ることならば私も何かお手伝いできれば良いのですが、部屋から出たら蹴飛ばされてしまいそうな怒涛の仕事ぶりに今は船長室のベッドの上でお留守することになりました。

窓の外に望む海はとても荒れています。まさにシケなのです。

カモメさんの言葉は正しかったらしくヴェルノさんが船員さんに嵐に備えておけと言って十分も経たずに空が真っ暗になってしまいました。

こんなときは人間の体でないことに感謝してしまいます。

右に左に揺れる船の中、ヌイグルミだからなのか船酔いすることもなく私は船長さんを待つことができますから。

当の船長であるヴェルノさんは船員の方々に指示を出すために甲板に残っています。アイヴィーさんも私を船長室に押し込むと足早に

甲板へ向かわれてしまいました。

もう一時間以上こんな状態です。

山の天気は変わりやすいと言いますが、海の天気も変わりやすいのでしょうか？

早く嵐が去ってくださるのを祈ることしか私にはできません。

柔らかな毛布に包まれながら、激しく窓を叩く雨と波を眺め続けることにしましょう。

嵐が来るかもしれないとカモメの助言を受けてから三時間後。

酷い暴風雨を連れて来た嵐が何とか過ぎ去った船の上は大の男たちがあちこちに倒れ込み、死屍累々と化していた。

海賊として暮らしている以上、何度も嵐には出くわしてはいたけれど、これ程に大きな嵐は久しぶりの出来事である。船が沈まぬよう全力で船上を駆け回り回っていた男たちが疲労に喘ぐのも無理はない。

雨で額に張り付いてしまった前髪をウザったそうに掻き上げてヴェルノは己の船を見渡す。

あの激しい嵐だったにも関わらず船体に損傷はなく、船員も誰一人として欠けている様子はない。

カモメが教えてくれたと真白から嵐の話聞いておかねばこうはならなかっただろう。

「アイヴィー。」

「はぁーい？なぁにい〜…?」

副船長であり、右腕であり、頼れる仲間でもある友人の名を呼べば酷く疲れた声音が返って来る。

見た目通り体力のある彼ですらこの様子なのだ。船員たちが動けなくなるのも頷けた。

「アイツは？」

「真白ちゃんなら船長室よお。…あーんなちっちゃい子がウロウロしてたら、船員の方が逆に動けなくなっちゃうでしょー…？」

「…確かにな。」

膝よりやや大きいのが、それくらいしかないヌイグルミが足元をウロついていたら下手に動けないだろう。

船長である自分のペットを蹴った踏んだとなれば罰は免れない。

…いや、アイツは気にしねエだろうな。

蹴っても踏まれてもケロリとした表情であの赤い瞳を向けてきそっだ。

妙に肝の据わったうさぎのヌイグルミを思い浮かべつつ、それが待つ自室へとヴェルノは足を向ける。

船内では食事の支度や波で落ちたり転がったりした荷物を片付ける船員たちが慣れた様子で立ち回っていた。

濡れた服が少々冷え始めて来た頃、漸く自室である船長室に着き、扉を開ける。…が、部屋にいるはずのヌイグルミの姿はどこにもない。

机にも、椅子にも、ソファーにもいない。

着替えるために服を脱ぎながら、一体どこに行ったんだと新しい服を出すべくタンスに歩み寄り、そこでふとベッドの上にある不恰好な膨らみ気が付いた。

窓の下辺りにだけ小山が出来ている。

上から覗き込んで見れば毛布の端から見覚えのある白がひょっこりはみ出ているではないか。

毛布を少し引つ張って覗き込んだヴェルノの視線の先には、ぐっすり眠りこけているヌイグルミの姿があった。

…何してんだ、コイツ。

あの大シケの中よくもまあ寝れたもんだ。

脱いだ服を適当なカゴへ突っ込み、備え付けのシャワー室に入る。簡易的なものなのでやや狭い造りではあるけれど、コックを捻れば温かな湯が降った。

雨に似たその音を聞きながら冷え切った体を温め、雨と塩水で固まりかけていた髪を大雑把に洗う。ある程度体が温まると石鹸で塩を落としてシャワールームから出る。

下着姿のまま、タオルで髪の水気を拭い取った。

まだ湿つてはいるものの放っておいてもどうせ乾く。ベッドを覗き込むとヌイグルミは未だ夢の中。

「ちっせえ。」

寝転がって毛布に埋もれているヌイグルミをヴェルノはしげしげと観察してみた。

子どもが喜びそうな可愛らしい外見、一目で高級品だと分かる真っ白な毛並みは驚く程に触り心地が良い。

ヌイグルミの癖に胸元がゆっくり上下に動いているのが不思議だ。呼吸をする必要もないだろうし、第一この小さな体に肺があるとも思えない。中身は柔らかな綿しかないはずだ。

力が抜けて投げ出された耳を触っていると小さな唸り声を上げて身を振り、余程嫌だったのかポフポフと丸い手がヴェルノの手を叩く。ちょっとした悪戯心で弄り続けていると赤い瞳が薄っすら目を開けた。石のようにツルリとした丸い瞳が半眼になっている様はなかなか



かに面白い。

表情を読み取ることが出来ないが雰囲気は酷く眠たげで、ぼんやりとヴェルノを見つめていた。

「……………せんちょー…?」

寝惚けているのか舌足らずな声が呼ぶ。

「起きたか。」

「ん…あらし、おさまった…ですか、?」

「お前が寝てる間にな。」

うにゃうにゃと言葉にならない呟きがヌイグルミの口があるであろう辺りから漏れ出ている。

まだ眠たいのか毛布に顔を押し付けて身を丸めてしまい、そうしてすぐに背中が規則正しく上下に呼吸をし出した。

船長である自分よりも先に寝るとは良い度胸だという思いとは裏腹

に、口元には笑みが浮かび、苛立ちや怒りを感じることはない。

これ程気分が良いのも久しぶりの事だった。

する事も無いと無沙汰だった手で眠るヌイグルミを撫でていけば部屋の扉が静かにノックされ、少ししてアイヴィーが扉を開けた。

「あら、お休み中だったかしら？」

「いや。」

起き上がったヴェルノの横で毛布に埋もれているヌイグルミを見つけ、覗き込んだアイヴィーは小さく笑いを零す。

「寝ちゃったのね。んもう、寝てる姿もすごく可愛いわあ。」

でも、もう食事なのに。困ったわねえ。

体はヌイグルミだが中身は人間でもある真白が食事をするのかさえ分からない。

本人が起きていれば確認する事も出来たが、生憎夢の中だ。

「起きたら聞けば良い。」

「…起きるかしら？」

「あの騒がしさで起きねえんなら、飯はナシだ。」

そうね、と先に船長室を出て行くアイヴィー。

その後を追うように、ヴェルノは熟睡している己のペットを抱き上げて己も食堂へ歩き出した。

ヴェルノとアイヴィーが食堂へ行くと、見張り以外の船員のほとんどが所狭しと各々の席に座って食事を初めていた。

料理長であろう男が調理場で忙しそうに動いている。

船長と副船長用の机には小奇麗に料理が並べられており、二人分の席の周りには幹部であろう男たちが数人座り、二人を待っていた。

「あ、船長お疲れ様ッス！」

その中でも一番歳の若そうな十代後半ほどの少年がヴェルノに手を振る。すると傍にいた別の男が少年の頭を軽く叩いた。

少年は文句を垂れながらも怒っている様子はなさそうだ。

少年を叩いた二十代後半くらいの男は歩いてくる二人へ静かに目礼する。

少年と男の他には、アイヴィー同様に髪を編み上げて右目にモノクルをした青年とスキンヘッドに刺青を入れた大柄の男が席についていた。

ヴェルノとアイヴィーがテーブルまで来ると左右に座っていた彼らが席を引く。

至極当たり前な様子で椅子に腰掛けたヴェルノの膝の上を見た少年が目を瞬かせて、白いヌイグルミを指差す。

「それも連れて来たんスか？」

「ああ。」

「食事出来るか聞きたかったのに、寝ちゃってるのよねえ。」

横からアイヴィーに頬を突付かれているにも関わらず、全く起きる気配を見せない真白を抱えながら船長は呆れた表情でペットを見下ろす。

船員たちが少し離れた場所で宴並みに騒いでいるのだがヌイグルミにとっては騒音にすらなっていないらしい。

アイヴィーが手を動かしたり、耳を触ったりして漸くゴソゴソと反応を示した。

「おい、好い加減起きろ。」

やや強めに頭を叩けば手の下から「ふぎゅっ！」という珍妙な声が聞こえて来て、眠気の残る赤い瞳が緩慢な動作でヴェルノを見上げた。

先程一度起きたからか、数回瞳は瞬いた後にしっかりとヴェルノへ焦点を合わせた後にペコリとでっかちな頭を下げる。

「…おはようございます?」

「言つとくが、朝じゃねエぞ。」

「でも起きたらおはようございますですよ。」

アイヴィーを覗く幹部たちは船長の膝の上でのほほんと会話を交わす生きたヌイグルミを半ば茫然と見つめていた。

気紛れなヴェルノは機嫌の良い時が極端に少なく、機嫌を損ねてしまえば幹部ですら近寄れないくらい恐ろしい。

そんな船長の膝の上に乗る、尚且つ運ばれ、平然と会話している真白は彼らから見れば驚くべき存在だろう。

ポツンと顔の中心にある黒い鼻がちょこちょこ動く。

「とつてもいい香りがします。」

「飯だ。…お前、食事は出来んのか。」

「さあ、この体でご飯を食べるのは初めてなので分かりません。」

食べてみたらとアイヴィーに差し出されたスプーンを丸い手が持つ。傍からすると丸い手にスプーンがくっついていているようにしか見えな  
いのだが、本人はきちんと持っているつもりらしい。

底の浅いカップに入れられたスープを器用にスプーンで掬う姿をヴェルノは面白そうに眺めている。

ばかり。真白本人は普通に口に入れたつもりだが、周囲の目が捉えた光景はスプーンの先の丸い部分がヌイグルミの口元直前辺りで消えているものだった。

「…食えたか？」

「はい。美味しいです。」

「味もすっかり分かるのねえ。」

真白が問題なく食事を摂れると分かり、ヴェルノも自身の食事へ手を付け出す。

すると幹部たちも食事をし始めた。

消えるスプーンの先が面白いのか、はたまたヌイグルミが物を食べる様子が面白いのか、時折ヴェルノが己の皿から野菜や果物なんかを与えるものだから幹部たちは殊更驚きに目を見開く。

一方真白の方も特に気にすることなく差し出された物をモグモグと消化した。

けれど小さな体では入る量も知れている。程無くして満腹だと腹部を擦りながらカップをテーブルへ戻したヌイグルミをアイヴィーに譲り、ヴェルノはまだ残っている自身の食事をゆっくり消費する。

汚れてもいないのにきちんと口元を拭いた真白はテーブルを囲む幹部を見て、テーブルの端へしがみ付いた。

「初めまして、真白といいます。ヴェルノさんに買われた役立たずなヌイグルミですが、よろしく願います。」



ペコリと、またでっかちな頭を下げた。テーブルとほとんど距離がなかったせいか、柔らかな頭が板にぶつかる。

「ばふつと音がして顔を上げた又イグルミをアイヴィーが起こし、「痛くなかった？」ぶつかったであろう額部分を撫でた。

「ぶつかる感覚はしましたが痛みはありません。」あっけらかんとした様子で頷く真白にヴェルノが笑う。

一部始終を見ていた幹部たちも、又イグルミが船長や船に害を成す存在には見えなさそうだと警戒心を解いて小さな存在を眺めた。

船長であるヴェルノに物怖じする事もなく話しかけ、たまに言葉に合わせて軽快に動く柔らかな手でその膝や腕を叩くので幹部は真白の動きに内心冷や冷やするけれど、船長は気にした風もなく小さな頭を軽く撫でる。

「ヴェルノさんもアイヴィーさんも、手が大きいんですね。」

ちよこんと丸い手が食事を終えたヴェルノの手に乗る。

汚れのない白に金の瞳が細められ、気持ち色黒の大きな手が又イグルミの手を掴んだ。

「人形より小せえなんて餓鬼くらいだろ。」

「なら大きくなる方法を探します。体が大きくなれば手も大きくなりますよね?」

「そんなにデケえと船から降ろすぞ。」

「あ、それは困ります。降ろされたら生きていけません。」

素直にそう言う真白にヴェルノは喉の奥で笑った。

ろく。

この間の嵐から数日が経ちました。

海賊船というからには、毎日が弱肉強食の奪い合いなのではと思っていた私の予想とは裏腹に、穏やかな日々が続いているのです。

船員のみなさんは思い思いにゲームをしたり、体を鍛えたり、好きなことをされている様子。

天気がいいからと甲板に椅子を出して　これは船員の方が運んで  
おりました　ゆったりと読書をされているヴェルノさんの前には  
私がいいます。

意味もなくそこにいるではありません。

「やだあ、この色も似合っ〜！」

アイヴィーさんに新しいお洋服の布地を当ててもらっているのです。明るい色や暗い色、淡い色の様々な布を私に合わせては楽しそうにニコニコと笑って、どんな服にしようかと考えてくださるので私としても出来上がりが楽しみでとても嬉しいです。

そうこうしているうちに本を読み終えたヴェルノさんが大量の布と私を見比べて言いました。

「薄い色にしるよ。」

「濃い色はだめですか？」

「服だけ目立つぞ。お前白じゃねエか。」

なるほど、白に赤や黒では私自身の色が服に負けてしまっわけですね。

アイヴィーさんも淡い水色の布を持ちながら「そうねえ。」と笑います。その布もとっても綺麗な色なのです。

寸法を測るからと必要な道具を取りに行ったアイヴィーさんを見送り、ヴェルノさんを見上げれば片眉を器用に上げてどうしたと聞かれました。

特に理由はないのです。

でもちよつとだけ恥かしかつたので傍にある布の山に潜り込んでしまいました。そうすると外から楽しげな笑い声が聞こえてきます。

船長さんは私がおかするといつも笑いますね。

私はそんなに変なことばかりしているのでしょうか？

布の中でごそごそしていると足音が近付いて来て、横辺りで止まりました。

「あら？真白ちゃん？」

どうやらアイヴィーさんだったようなのです。

「はい、ここにです。」

布の中から何とか頭だけ出すとアイヴィーさんの顔が一気に笑顔になりました。

可愛い可愛いと、それこそ猫可愛がりするように頭を撫でられます。アイヴィーさんは船長さんとは逆に、いつも私を可愛いと褒めてく

でございますね。

このヌイグルミの姿では当たり前でしょう。

私自身もとても可愛いヌイグルミだと思います。

布の山からアイヴィーさんは私を上手に引き抜くと、メジャーのよ  
うなものを手にして見下ろしてきました。

「お部屋で測った方が良いかしら？」

「？」

「服着たままだとしっかり測れないのよねえ。」

そうですね、体のサイズを測るときは基本下着姿でやります。

ヌイグルミもどうやら同じ方法のようですが、私はここで測ってい  
ただいても全く問題ありません。

何せヌイグルミですから服を脱いだところでもふもふ、ふわふわの  
寸胴な体が出てくるだけなのです。

「構いませんよ。」と言えはそう？と少し考えたアイヴィーさんが、  
ちよつとだけ体をスラして甲板で遊んでいる船員の方々から見えな  
いように壁になってくださいました。

ヴェルノさんとアイヴィーさんの傍にはあまり船員の方も近付かないようなので、それで充分目隠しになります。

ワンピースを脱ごうともそしていましたら、頭上からとても視線を感じました。

見上げるとヴェルノさんが肘掛けに頬杖をつきながらニヤリとした笑みを浮べて私を見下ろしています。

「どうした？脱がねエのか？」

いくらヌイグルミの体でも中身は女の子なので、そんなに注視されるとやっぱり少しだけ恥かしいのですよ。

「ヴェルノ、女の子の着替え中は見ちゃダメよ？」

「俺のペットだ。別に構わねエだろ。」

「もう！そついう問題じゃないわ！」

アイヴィーさんが注意してくださいますが、船長さんはどこ吹く風。

全く悪びれた様子もなく私を見ています。

とても気になります。が仕方ありません。

ヴェルノさんに背中を向けてワンピースを脱ぐとアイヴィーさんが綺麗に畳んでくれました。

ワンピースの下は自分でも気が付きませんでした。が丈の短いキャミソールのようなものと、かぼちゃパンツを着ていたようで、裸にならずに済みました。

かぼちゃパンツなんて生まれて初めてです。

しげしげと眺めていると「色気がねえな。」とヴェルノさんから呆れと笑いの含んだお言葉を頂戴します。

ヌイグルミに色気を求められてもそれは難しい注文なのですよ。

「ナイスバディな方が好みなのですか？」

「そうとは限らねえよ。俺を苛立たせねえ女が居りゃあ一番良い。」

「…ヴェルノさんは短気さんなのですか？」

初耳です。驚きの新事実です。



テキパキと私のサイズを測るアイヴィーさんが「そうよお、とーつても短気なんだから。」と溜め息混じりに言いました。

でも私はこの船に乗らせていただいてから一度も船長さんが怒る姿を拝見したことはありません。

むしろ大らかで心の広い方だと思っておりました。

ほとんど笑っている姿しか目にしていませんので。

そう私が告げましてもヴェルノさんには「お前は面白いからな。」とよく分からない返事を返されてしまいます。

仲良きことは美しきかな。

喧嘩しているより、怒るより、笑っている方が私も嬉しいですし、美形なヴェルノさんの笑顔は素敵なので、怒った姿も気になります。がやはり今のままが一番いいのかもしれない。

「はい、終わったわよお。」

メジャーらしきものを巻きながら服を着ちゃいましょうねとアイヴィーさんに促され、ヴェルノさんの痛いくらいの視線を背に感じつつワンピースを着込みます。

布一枚とは言いましても、やはりお洋服を着ると安心するのです。

いつ頃完成しますかと聞いてみれば早ければ明日にでも一着くらいは出来上がると聞いて嬉しくなりました。

汗を掻かない身とは言え、流石に何日も同じ服を着ているのは嫌なのです。

「お風呂にも入れたらいいのですが…、」

「風呂？」

「はい、ちよつと体が汚れてきてしまっているのです。」

「入れるのかしら？」

食事と同じで何事も試してみなければ分かりません。

聞くより慣れる、考えるより行動に移せ、です。

船長室の隣にあります浴室をお借りしてもいいですか。そう聞くとヴェルノさんが呆れた顔で今から入るのかと言いました。

全は急げ。思い出したが吉日。意欲があるうちにやらなければ。

ヴェルノさんは少しだけ笑って好きにしろとおっしゃってくださいました。

船長室まで行ける？とアイヴィーさんい聞かれてちょっと悩みましたが、はいと答えておきます。

いつも抱っこされていますが、せつかなので自分の足で行ってみたいのです。

意気揚々と船内へ乗り込む私にヴェルノさんの声がかかります。

「蹴られるなよ。」

そんな小さな気遣いが嬉しくて、私は大きな声で「はいっ」と返事をして開いている扉から薄暗い船の中へと足を踏み入れました。

なな。

薄暗い船内ではそこかしこの部屋から楽しげな笑い声が聞こえてきます。

船員のどなたかが船長さんはとっても怖いのだとおっしゃっておりましたが、こんな穏やかな船の船長さんが恐ろしいとは思えません。

とりあえず通路を歩く人の邪魔になっってはと端の方を歩くことにしました。

大きな船ですの中はとても入り組んでいまして、若干迷ってしまいそうになります。

やはり抱えてもらっているとなかなか道を覚えることができませぬ。

それでも何とか食堂まで辿り着きますと何やら楽しげな談笑が響いてきました。食堂をちょっと覗き込むと幹部の方々が一つのテーブルに集まって何かをしています。

…すごくすごく気になるのです。

お邪魔になつてはいけないのでそつと近付いたはずなのですが、流石みなさん海賊と言っただけあつて後三メートルくらいの位置まで来た私を全員がパツと振り返りました。

あまりに息がピッタリに振り返るので私もビツクリして足が止まつてしまいます。

「あー！うさぎー！」

一番歳下のセシル君が私を指差して声を上げます。

私はうさぎのヌイグルミではありませんが、できれば名前で呼んでいただきたいのですよ。

そう思つていましたら右目にモノクルをかけたレイナーさんが「彼女には真白という名前があるんだよ。」と彼を窘めてくださいました。

どうしまししょうか悩んでいると一番私に近い場所に座っていた黒髪のユージンさんに手招きされます。

無表情でしたので少々緊張しましたが近寄ると優しい手付きでテーブルの上に乗せてくれたのです。

スキンヘッドのディヴィさんが目線を合わせるように体を屈めて聞いてきました。

「一人か？」

落ち着いた声に頷けばレイナーさんが珍しいねと目を丸くします。

今まではアイヴィーさんかヴェルノさんがずっと傍にいましたから、無理もないのです。

「みなさんは何をしていますか？」

よく見てみれば全員の手には小さなナイフが握られていまして、この光景だけを見ると空恐ろしいのですが。

セシルさんがニツと笑って「ジャグラーって言う海賊のゲームツスよ！」と私の前に木で出来たサイコロのようなものと、いくつも大きな板が入った袋を置きます。

サイコロは私が両手で持たなければいけないくらいの大きさで、みなさんの手の平に何とか納まるくらい大きかったです。

一には罫罫が一つ、六には罫罫が六つ描かれたそれは私のよく知るサイコロとは真逆の黒一色で、罫罫だけがいやに白く塗られています。

した。

「まずこの賽を振って自分の数字を出すんす、それから板に書かれた自分の数字の所をナイフで刺すんす。中に入っていた硬貨と同じ硬貨を入っていた数と同じだけ手元に取り取ることができるんす。金貨や銀貨や銅貨は全部同じスけど、黒と赤の硬貨は別ツス。」

金、銀、銅、黒、赤。五つの硬貨が目の前に置かれて、そのうち金銀銅だけセシル君が持っていつてしまいます。

黒をレイナーさんが、残った赤をデイヴィさんが取りました。

「黒は全員が持つ全ての硬貨を奪うことが出来るんだよ。」

「赤は逆に自分の硬貨を全て没収される。没収された硬貨は捨て硬貨になって、誰の物にもならない。」

「では運がよくなければ勝てないのですね。」

「その通り。海賊には力だけじゃなく、運も必要だからね。」

せつかくだからやらないかと誘われましたが、見てみたかったので

丁寧に遠慮させていただきました。

みなさんはそうかと笑って早速ゲームをやり始めます。

全員がサイコロを振って、セシルさんは二、レイナーさんは五、ユージンさんは一、デイヴィさんは三。全員でナイフを持つと一斉に板の自分の数字が書かれた場所を突き刺しました。

どごん。大きな音と衝撃がテーブルを少し揺らします。

ビックリして後ろに転がった私をユージンさんが慌てて受け止めてくださいました。

他のみなさんは可笑しそうに笑います。

「ありがとうございます。」

御礼を言うとユージンさんは首を緩く左右に振りました。

不思議に思っていましたらセシルさんが「ユージンは話せないんですよ。」と教えてくれました。ちょっとだけ申し訳なくて謝った私の頭をユージンさんは優しく撫でてくれます。

気にしなくて良いと言われた気がして少しホッとしました。

板を覗き込むとナイフを抜いたみなさんがそれぞれの数字部分の板



を外します。

セシルさんは銅貨三枚、レイナーさんは金貨一枚、ユージンさんは銀貨四枚、デイヴィさんは銀貨二枚。今のところ一番はレイナーさんだそうです。

銅貨五枚で銀貨一枚、銀貨五枚で金貨一枚分に相当すると教えてくださいました。

これを五回繰り返し返して一番多額の硬貨を持っていた人が勝ちなのだそうです。

遊びも気になりますが、金貨や銀貨のキラキラとした輝きがとても魅力的なのです。金銀銅の硬貨はこちらのお金らしいのですが、本物で出来ているせいかズッシリと重く、とても綺麗です。

ジツと見つめていましたらレイナーさんが苦笑して「後で船長にお願いしてみたら？きつと貰えるよ。」と言いました。

後で必ずお願いすることにします。

まだ遊ぶ様子のみなさんに御礼を述べて、ユージンさんにテーブルから降りしてもらった私は今度こそ船長室へと向かいます。

薄暗い通路を歩いていると何人かの船員の方々と擦れ違いましたが、みなさん私をみると少し驚いた顔をして、それから、

「どこ行くんのだ？」

「暗いから気をつけるよ。」

と声をかけてくださいます。

それがとても嬉しくて返事を返せば数人の方が私の頭を撫でていきました。

ヴェルノさんもそうですが、この船の方は頭を撫でるのがお好きなのですね。

優しい船員の方々の好意にほっこりした気持ちになりながら、私は暗い通路を船長室までゆっくり歩くことにしました。

はち。

さらに数人の船員の方々と擦れ違い、ようやく私は船長室に到着することができました。

後はこの扉の向こうへ行かなくてはなりません。

が、問題が現在進行形で発生中なのです。

困ったことに扉が開けられません。だって、私はヴェルノさの膝より少し上くらいしか身長がないのですから、それよりずっと高い位置にあるドアノブに手が届くわけもないのです。

…なぜ今まで気が付かなかったのでしょうか？

ああ、困りました。どうしようと考え、そこでふと先ほど廊下で出会った船員の方が頭に思い浮かびます。

あの方をお願いして扉を開けていただきますよう。

少しだけ通路を戻ると、先ほどと変わらず掃除をしていらっしゃる船員の方が戻って来た私を見て首を傾げます。

「ん？どうした？」

大柄な方ですが私に目線を合わせようとぎざぎざ屈んでくださいます。

「すみません、船長室の扉を開けてもらえませんか？」

「船長室、かい…？」

「はい。扉の取っ手が高すぎて、手が届かないのです。…あ、船長さんに許可は得ていますので大丈夫ですよ。」

そう告げますと納得した顔で快く了承してくださいました。

船長室へ戻り、船員さんが扉をそっと開けて私を見ます。どうすべきか迷いましたが、「また開けて欲しくなったら扉叩けよ。…近くで掃除してやるから。」と気遣ってくださいいます。

この船にいる方々は本当になんて素晴らしい人たちなのでしょう。

深々と頭を下げた私に苦笑して船員の方は扉を閉めてくださいいまし

た。

ヴェルノさんのお言葉に甘えて浴室に向かいますと、小さなバスタブと体を洗うスペースだけの狭く、簡易的な場所でした。私からすれば充分な広さですが長身の船長さんには些か狭いのではとも思いますが。

一度浴室から出て傍に積まれていたタオルのような布から大きなものと小さなものを二つお借りすることにします。

浴室の扉は横にスライドさせるものだったので私でも普通に開け閉めすることが出来ました。

持ってきたタオルを浴槽の隅っこに置き、シャンプーなどのボトルが置かれている段に上ってやや高い位置にあるシャワーのノズルを何とか引きおろします。

コックを捻ればノズルからザアと勢いよくお湯が出て、そのお湯にそっと手を触れてみました。

…温かいですね。

濡れた手を見ると不思議なことに水は染み込んでいません。でも濡れた感覚と言いますか、ああお湯に触れているなという感覚はするのです。

一度コックを戻すとタオルで軽く手を拭き、ワンピースと下着を脱いで脱衣所にあった箱の隅へ置かせていただきました。

そこでふと頭上から慌ただしい足音が聞こえてきた気がしました。

何ごとでしょうか？

気になります、今はせつかくの至福の一時ですので後で聞いてみることにします。

改めてシャワーでお湯を浴びれば久しぶりの心地よさに知らず溜め息が漏れてしまいました。

「…お風呂に入れるというのは、幸せですね。」

いくつか並ぶボトルを見ますとシャンプー、コンディショナー、ボディーソープそれからあまりよく分からないものがあります。

…ヌイグルミは髪がありません。でも、一応シャンプーをしておくべきでしょうか？

とりあえず普段と同じようにシャンプーを手に取って泡立て、わっしやわっしやと頭を洗ってシャワーで流します。二度シャンプーをした後に同様にコンディショナーでも洗います。

そのあとに、傍にあった丸いものにつけて体を擦ります。

柔らかいスポンジみたいなそれはとても泡立ちがよくて、あっといふ間に私の全身は泡だらけになってしまいました。

それすらも楽しくて仕方ありません。

鏡に映ったうさぎのヌイグルミは、あわあわ、もこもこ姿。体を擦ると泡は留まることを知らないのではと思うくらい、ふんわりと増えて行きます。

泡を充分堪能してシャワーで流していましたら船長室の扉が開く音がしました。

どうやらヴェルノさんが戻られたようなのです。

ノズルを壁にかけていましたら、脱衣所の扉が開く音がしました。続いて服の擦れ合う音が扉越しに響きます。

…もしかして…？

「ヴェルノさん？」

声をかけると扉の向こう側から「まだ入ってたのか？」と呆れを滲ませた声が返ってきました。

それから、勢いよく浴室へと繋がる扉が開かれます。

何も履いてない足が見えます。でも、恐ろしくて上を見ることは出来ません。

「あの、あの…、」

視線を落としたまま、何と言えがいいのか困りました。

出て行ってくださいではおかしいのです。この浴室も船長室の一部ですから、ヴェルノさんのものですし。

タオルで隠そうとしましたが先に手を掴まれてしまって、それすらもできません。

又イグルミとは言え恥かしさはありません。

なのにヴェルノさんは浴槽にお湯を張りながら、私を抱え上げて専用の椅子みたいなものに腰掛けてしまいました。

…あ、タオルは巻いているんですね。

膝の上に乗せられてタオルが巻いてあることを確認できた私はそつと顔を上げます。目の前にはニヤリと笑うヴェルノさんの整った顔。本当にイグルミでよかったのです。もし人の体であったならばおぼせているか、悲鳴を上げてしまっておりました。

「お前、ずっと此処に居たのか？」



頭を洗い出したヴェルノさんに「はい。」と頷けば、低く喉の奥で笑われました。

見上げると片方だけ開けられた金の瞳が丁度私を見下ろしてきます。

「襲撃された。」

「え？襲撃って、襲われたってことですか？」

「ああ。あんな騒いでたのに気付かなかったのか。」

「…泡で遊ぶのに忙しかったのですよ。」

泡をシャワーで洗い流し、今度はリンスを使います。膝から下ろしてほしいのですが、下りようとするやと強い声で下りるなと命令されてしまいます。

体まで洗い終わったヴェルノさんは私を抱えたまま、今度は浴槽へざぶんと浸ります。

危うく沈みそうになりましたが、それに気付いてくださったヴェルノさんが私を抱えたまま狭い浴槽から足を出して横になりました。



きゅー。

「襲撃は、なんともありませんでしたか？」

気持ち良さそうに目を閉じていたヴェルノさんは私の問いにああと細く目を開けます。

「負傷者も死人もねエ。オマケに今回は良い収穫だった。」

「お宝ぞつくざく、ですか？」

「まあ、宝じゃねエが色々必要なモンも手に入ったぜ。」

それは相手の船の方々がお気の毒でしたのです。

この船は海賊船ですから、略奪行為はヴェルノさんたちにとってと

ても自然なことなのでしょう。

それで養われている私ができることについて、とやかく言う資格もありません。

でも見たところ怪我もない様子なので安心しました。

浴槽の縁にべったりとくっつく私を見たヴェルノさんは「そっぴや、風呂は問題ねエみてエだな。」と背中を指で突付けてきます。

服を着ている時ならばまだしも、今の状況でそれはダメなのですよ。離れようとするれば逆効果だったようでガツチリ抱え込まれてしまいました。

結局ヴェルノさんが心行くまでお風呂を堪能し、俺が出るまでお前も出るなという命令に従わざるを得ない状況になったのです。

…又イグルミでよかったと心底思いました。

だいぶゆったりお湯に浸かっていたヴェルノさんは起き上がると浴槽の縁に置いてあったタオルで私を包みます。

全身をさらすのは恥かしかったのですが、綺麗な金の瞳には変な色はなく、ただ純粹に楽しげに細められていたので澁々拭いていただけ、先に失礼することに。

脱衣所できちんと拭くと完全に水気はなくなり、入浴前よりもふんわりもこもこの又イグルミが鏡に映ります。

毎日入浴せねばこの綺麗な白と素晴らしい手触りは維持できないか  
もしれませんね。

ワンピースを着終えて脱衣所から出ますと、アイヴィーさんとバツ  
チリ目が合ってしまった。

ニツコリ笑顔で「ヴェルノと一緒に入ってたのねえ。」なんて語尾  
にハートがつきそうな口調で言われてしまい顔が熱くなってしまう  
ます。

ヌイグルミなので見た目では分からないでしょう。

とりあえずアイヴィーさんとソファーに腰かけて待っていましたら、  
程無くしてヴェルノさんも脱衣所から姿を現しました。

ガシガシと適当に拭っているからか、髪からはポタポタと雫が落ち  
ています。

「やっと出て来たわね？遅いじゃない。」

ソファーから立ち上がったアイヴィーさんは不満そうな声でそう言  
いました。

ヴェルノさんは意地の悪い笑みを口元に浮べて私を抱き上げます。

「うるせエな。せつかく一緒に入ってたんだ、楽しませるよ。」

「アタシたちも色々楽しみたいの！全く、今回は酒の手に入ったから船員も首を長くして待つてるんだから。」

「分かってる。行きゃあ良いんだろ、行きゃあ。」

薄いワイシャツ越しに温かな体温を感じると、とてもホツとするのは何故でしょうか？

抱えられてお二人について行きましたら食堂ではなく甲板へ出てしまいました。

甲板の上には何やら大量のお酒と食べ物、それから沢山の宝石や貴金属類が山を成しているではありませんか。

驚いて見つめていた私に気付かなかったのか「思ったより少ねエな、」ポツリとそうヴェルノさんは呟きます。

これで少ないのですか？

見上げるとやや不満そうな顔の船長さん。アイヴィーさんが苦笑します。

「どつやら商品売り終わった後だったみたい。その分のコッチも

しっかり回収してあるから、そう怒らないでよお。」

親指と人差し指で丸く形を作って笑うアイヴィーさんに「そうか。」と返事を返したヴェルノさんは先ほどよりも少しだけ機嫌が直っていました。

…アイヴィーさんの今のあれは、お金という意味ですよ。きっと。商船の方々には申し訳ありませんが、奪った以上はこの船の、そうしてヴェルノさんの物なのですから仕方がありません。

弱肉強食とは本当に恐ろしい世界ですね。

入浴する前にありました椅子は船尾から船首に移され、ヴェルノさんがどっかりと椅子に座ります。

横に下ろされた私もちよこんと座っていたらお酒とお料理を持ったアイヴィーさんと幹部のみなさんが回りに座りました。

船長さんは渡されたグラスを高々と掲げます。

「今日はなかなかの収穫だった。お陰で酒も手には入った…野郎共、今夜は派手に飲め！俺が許す、宴を始めろ！！」

なみなみと注がれていたお酒をヴェルノさんが仰ると、全員が一気に手に持っていたジョッキの中身を飲み干しました。

一気に船員さん方が騒ぎ出します。

私は渡されたコップを両手で抱えたまま出遅れてしまったのです。なんと言う不覚。

そこかしこで騒いで、飲んで、時には踊り出す方々がいる甲板はまさに宴という言葉が相応しい状態になりました。

その様子を目を細めて眺めているヴェルノさんは船長の顔をしています。

嬉しそうな、楽しそうな、穏やかで、見守るような金の瞳は吸い込まれてしまいそうなくらい綺麗に輝いていたのです。

ぼんやりと見上げていましたら視線に気付いたヴェルノさんがフツと緩く微笑んで私の頭を撫でました。

筋張っている手は少し浅黒く、いくつかの古い傷跡が薄っすらと残っています。そんな大きな手で何度も何度も子どもにするように頭の上をゆっくり動くのです。

「ヴェルノさんは、幸せですか。」



唐突な問いでしたが、特に気にした風もなくさあなとはぐらかされてしまいました。

アイヴィーさんは幹部の方々とジャグラーを楽しんでおられます。

離れた場所では何人かの方々が既に泥酔状態で酷く楽しげに笑っていて、その光景をどこか眩しそうに見つめているヴェルノさんは、私から見ると幸せそうに見えました。

そつと船長さんの足に寄りかかりますと、金の瞳が船員さん方から私へ向きます。

優しい…本当に穏やかで優しい色の瞳に映った私を見て、少しだけ泣きたくなってしまうました。

「…私は、とても幸せなのです。」

頭に乗ったままの手に触れば温かな体温が丸い手の先から全身に広がる気がしました。

この手が例えどんなに大勢の人の命を奪ったとしても、沢山の悪事を働いたとしても、私はヴェルノさんや船員の方々を嫌いになることは出来ないでしょう。

視線を向けた先には笑い合うみなさんの姿。

海賊とか、そんなもの関係ないくらい無邪気な笑顔がそこにあるのです。

「海賊でもいいんです。みなさんは私にたくさん優しくしてください。たくさん、たくさん。新しいを教えてくださいました。…ヴェルノさんに買っていたからこそ知ることが出来たのです。こんな素敵な海賊船に私を連れてきてくださって、ありがとうございます。」

私は今、とても幸せなのです。」

稚拙な言葉しか組み合わせられないのが歯痒いのです。

この温かな気持ちが伝わればいいのに。

見上げた先で柔らかく笑うヴェルノさんの表情に、ないはずの鼓動がドキリと音を立てた気がしてしまいました。

じゅぶ。

商船という船は本当に商売のための船だったのですね。

いつもより少しだけ豪華な朝食を見ながら感心してしまいました。

さて、今日着ているワンピースは昨日までの物ではありません。

アイヴィーさんお手製の可愛いお洋服なのです。

白を基調としたふんわりフレアスカートのワンピースは、袖と襟、スカートの裾部分が淡い桜色で、小さな同色のお花がワンピース全体に散らばっています。

ウエスト部分の後ろには桜色の大きめなリボンがあって存在感を主張していました。

丸襟なのがとってもキュートですな。

スカートの裾も段々になっていて歩くとふわっと揺れて可愛いのです。

耳には片方だけ白と桜色のストライプ柄のシュシュみたいなものも装着されて、女の子が大好きそうな可愛らしいヌイグルミに仕上がりました。

「いやーん、真白ちゃん可愛過ぎーっ！」

服を汚さないよう気を付けてお野菜を食べていますとアイヴィーさんは体をくねらせて悶えます。

可愛くなったのはアイヴィーさんが作ってくださいましたお洋服のお陰なのですよ。

そう言えばギユギューツと抱きつかれてしまいました。

船員の方々は遠めに私を見えています。でも、その目は穏やかなので怖くはありません。

幹部の皆様も私の姿に頭を撫でながら「似合ってる」と褒めてくださいます。

後は船長であるヴェルノさんだけなのですが生憎彼はまだベッドの中で就寝中なのでね。

早く起きて来ないでしょうか。

口の中でしゃくしゃくと鳴るお野菜の瑞々しさを噛み締めつつ、食堂の入り口ばかり気にしていたせいかな食事を終えるとユージンさんが前触れもなくヒョイと私を抱え上げました。

見上げると綺麗な無表情で見下ろされます。

「行ってらっしゃい。」

訳知り顔で手を振るアイヴィーさんに同様に振り返し、ユージンさんが私を抱えて通路を歩きます。

道順からしますと船長室なのです。でも、ヴェルノさんはお休み中なのですよ？

スタスタと足取りも軽やかに船長室に到着したユージンさんはノックを一度して、返事がないのに躊躇いもなく扉を開けてしまいます。朝私と一緒に寝かせていただいていた時と何ら変わらない様子でヴェルノさんはベッドで眠っていました。

ユージンさんは私をベッドの上にポイと投げ捨てますと口元を微妙に引き上げて意味深な笑みを残して去ってしまいます。

…私にどうしろと言うのでしょうか？

熟睡しているヴェルノさんの横で投げ出された状態のまま悩んでい

ましたら、金の瞳が薄っすらと開きました。

「あ、おはようございます。」

「……………」

眠いからか、それとも返事をする気がないのか無言と一緒にジッと見つめる視線まで返されず。

少ししてから何か納得した風に一度目を閉じたヴェルノさんは私を引き寄せます。これはもしかしなくても抱き枕のお仕事再開でしょうか？

せつかく起きて朝食まで頂きましたのに、これで寝てしまつては牛になつてしまうのです。

太ったヌイグルミはさすがに嫌なのですが…。

ガッチリ固く抱き締められておりまして逃げる隙間が一部もありません。

数度腕を叩きましたら不機嫌な唸り声と共にうなじ辺りに顔を埋められてしまい、起こすのは断念せざるを得ない状況になりました。

真後ろから聞こえて来る寝息と首筋に当たる息がくすぐったいのですが起きるまできつと離してくださらないのですね。

腕の中で振り返りますと目の前には丁度ヴェルノさんのお顔があります。

そつとその頬に自分の頬を寄せ合わせて、私も眠ることにします。

「 ……寝るか、普通？」

真白から規則正しい寝息が聞こえて来ると、ヴェルノはパチリと目を覚ました。

ユージンが部屋の前に立った時には既に起きていたのだが、ベッドの上にぽんと飛んで来たものが真白だったためそのまま狸寝入りを決め込んでいたのだ。

見てみればアイヴィーが作ったたろう可愛らしい服に身を包んだ又イグルミが投げられた格好のまま、ころんと横になっているではないか。

のほほんと挨拶を交わしてくる又イグルミは、外見に反して中身は



少女だ。

ベッドの上で異性といるといつのに相変わらず危機感やら羞恥やらを感じていない様子の真白に何とも言えない気持ちになりながら抱き寄せる。

でっかちな頭の後ろに顔を寄せると白くやわらかな体は自分と同じ香りがした。

昨日入浴したからだろうか？

自分と同じ匂いがあるだけだが、とても良い。自分のものだとハッキリ分かる。

これからは毎日入浴させようと内心思いながら目を閉じていると、寝てしまったと思ったのか腕の中の真白は振り返り、頬に頬を寄せて寝入ってしまった。

少女のような無垢さと、大人のような聞き分けの良さと、予想のつかない行動をするヌイグルミ。

何もかもが初めてで面白い。

ぐっすり眠りこけている真白の腕や耳をふにふにと弄りながら、何時もより少し早く目覚めてしまったヴェルノは目の前のヌイグルミについてツラツラと思いを巡らせていた。

が、不意に甲板の方が騒がしくなった気がして弄っていた手を止める。

音に集中していれば船長室へ向かってくる足音がした。

おそらくアイヴィーだろう。

ヴェルノがそう検討を付けるのと扉がノックされるのは同時で、入室を促してやれば思ったとおりアイヴィーが入ってくる。

「どうした。」

「ルイスの船が見えたわ。多分会いに来たんだと思うけど。」

「久しぶりだな。」

「そうね…半年ぶりじゃない？」

起き上がったヴェルノは手早く服を着替え、すうすうと寝息を漏らす真白を起こさぬよう細心の注意をしながら抱き起こし、片腕に乗せて自身の肩にもたれ掛けさせる。

動かしたせいで少し身じろいだものの丸い手が服を手繰り寄せる姿にフツと笑みを零した。

寝ている真白の前では流石のアイヴィーも騒がなかったがニツコリとした笑いは嬉しそうな、それでいて楽しそうなものである。

船長室から出てきた二人の姿を見て、次に眠っている真白の姿を確

認した船員たちは小さな声で挨拶をしていく。

甲板へ出て来たヴェルノに幹部たちも振り返り、その腕の中で気持ち良さそうに寝ているヌイグルミに脱力した様子で互いに顔を見合わせた後に誰からともなく笑い合った。

じゅうぶらずいち。

幹部たちが笑っているうちに遠くにポツリと見えていた船が目視できるところまで近付いた。

ヴェルノは船員に指示をして帆を畳み、自船の速度を落とす。

穏やかな波に乗って近付いて来る船に掲げられた旗は髑髏が描かれ、見慣れたそれは自分のものとよく似ている。

やがて隣にゆっくりと追いついたその船から男が一人ヒョイと飛び移ってきた。

背中まである鳶色の髪に、金の瞳を持つ男はヴェルノの前まで来ると笑みを浮べる。

「久しぶりだなあ。」

差し出された手をヴェルノは力強く握り返した。

「ああ、最近見ねエから海軍に殺られたかと思っただぜ。」

「冗談。あんな奴らに負けるなんてありえないっての。」

「そりゃ良かった。元気そうで何よりだ、ルイス。」

ルイスと呼ばれた彼は自身の船に手を振って合図を送る。

そうすれば互いの船から梯子のようなものがかけられ、自由に行き来できるようになった。

船員たちも同士の無事を確認し、確かめ合い、楽しげに話を始める。

そんな姿を眺めていたヴェルノにルイスは気になっていた疑問を投げかけた。

「ところで、その人形はどうしたんだ？」

海賊船長と真っ白なふわもこヌイグルミというあまりにもアンバランスな組み合わせにルイスは苦笑する。

ヴェルノは眠ったままの真白を見下ろし、ああと溜め息のような返事を返した。

「ペットだ。」

「ペット？って…え、それ生きてんのか？」

「生き物じゃなきゃ飼えねエだろ。」

トントンと手で小さな背を軽く叩いて起床を促せば、ヌイグルミはヴェルノの服に顔をすり寄せながら「…うー…、」と小さく唸る。

嫌がる素振りを見せたヌイグルミをルイスは目を見開いて見つめ、溜め息を零す。

そんなもんも居るんだなあ。なんてどこか感心した様子で呟いた。

聞き慣れない声に反応したのかピクリと耳が動き、閉じていた赤い瞳がぼんやりと開かれる。

最初にヴェルノを見て、それから酷く緩慢な動きで周囲を見回し、見慣れぬルイスでピタリと首が止まった。

焦点のズレていた瞳がすっかり合わさった途端、ヌイグルミはびっくりした様子で目を見開いた後にヴェルノの腕の中から逃げ出してしまう。

ぼてり。結構な高さを顔面から落下した真白には抱えていたヴェルノも若干驚いていたけれど、あたふたと傍にあった木箱の後ろへ隠れる姿はまさに草食動物の動きだった。

箱の影に入り切らずに耳が出てしまっているのだが恐らく本人は気付いていないのだろう。

赤い瞳がチロリと箱の影からルイスを覗き見て、目が合うとパツと引っ込んでしまった。

妙に愛嬌のあるその動きに先に噴出したのは主人のヴェルノ。

箱の影でモソモソと動くヌイグルミに振り返り腰を落とす。

「おい、隠れんな。」

子どもを諭すような優しい口調でヌイグルミに声をかけたヴェルノにルイスは驚く。

どちらも海賊としてはかなり名を馳せている悪だが、彼が誰かに対してこれほどに優しい声をかけることなど初めて見る光景だったのだ。

主人に言われたからか、箱から顔を半分ほど出してコチラの様子を伺うヌイグルミ。

周囲の幹部や船員たちも苦笑するだけでペットの無礼を気にした様子もない。

「…真白。」

少し強めにヴェルノが名を呼ぶと真っ白な耳をピンと立てて、顔を上げた。

箱の裏側へ逃げ込んだ時よりも、ずっと早い動きで真白はヴェルノの足に駆け寄り、しがみ付く。

「名前！今、名前を呼んでくださいました！！」

「それが何だ。」

「初めてです！ヴェルノさんが真白って呼んでくれたの、初めてでしたよ！」

ルイスを警戒していたことなど綺麗サツパリ忘れて足元でワーワー騒ぐヌイグルミを抱き上げたヴェルノは呆れた表情で、だがとても楽しそうな雰囲気滲ませて「くだらねエな。」と言う。



それから真白をルイスの方へ向かせた。

途端にピタリと口を噤んでしまった真つ白なうさぎのヌイグルミにルイスだけでなく、その場にいた全員が苦笑する。

「俺はルイス・クラウザー、小さなヌイグルミ君の名前は？」

「あ…真白といます。」

「真白か。真つ白だからとか？」

「いえ、もともとそういう名前なのです。」

言いながら真白はマジマジとルイスを見て、それから自分を抱えるヴェルノを見た。

分かりやすい動きにヴェルノが笑いながら種明かしをする。

「ルイスは俺の兄だ。」

「え、え？ルイスさんはヴェルノさんのお兄様なのですか？」

「そう、正真正銘ヴェルノは俺の弟だよ。」

衝撃の事実にならずショックを受けている様子の真白を抱え直し、ヴェルノはせつかくだから今日は宴でも開こうと提案し、それは良いと楽しげに承諾するルイスに双方の船員が両手を上げて喜んだ。

置いていかれていた真白も漸く我に返って「宴ですか。」と呟く。

それを耳聴く聞いたルイスがなかなか手に入らない物も幾つか持ってきたと言うものだから、真白の興味は既に「珍しいもの」と「宴」に向けてしまう。

さっきまではおっかなびっくりだったクセに、キラキラと目を輝かせてルイスを見やるヌイグルミの好奇心の旺盛さと単純さにヴェルノは一度軽く頭を叩いてから笑った。

## じゅうぶらすに。

ルイスさんという、ヴェルノさんのお兄様が来られたからか、船の中はいつもよりとても騒がしい声が聞こえてきます。

でも嫌な気持ちは微塵も湧きません。不思議なのです。

ちょっと離れた場所ではルイスさん率いる船員の方々とヴェルノさん率いる船員の方々が互いに肩を組み合って楽しそうにお酒を酌み交わしていました。

「おーい。」

かけられた声に視線を戻しますと、見たこともない不思議な物を沢山持ったルイスさんが私を見つめています。

先ほどは珍しい物という言葉に釣られてしまいました。今回はそ

うは行きません。

私はヴェルノさんのペットではありませんが心持ちは船員の意気なのです。

例えお兄様であるうとも簡単になびいてはいけないのです。

キラキラと輝いて誘惑している貝殻のネックレスなどはとても気になりますが見てみぬふりです。

プイとそっぱを向きましたら頭上からヴェルノさんのクツクツと笑う声が降ってきました。

見上げれば案の定口元に手を添えて愉快そうに目を細めていらっしやいます。

「良いのか？気になるんだろ。」

思い切り心の中を見透かされているのです。

「ダメなのです。」

「何がだ。」

「私はヴェルノさんのペットです。だから、簡単に他の人になびいては面子に関わるのです。」

私の言葉に一瞬虚をつかれた顔をし、それから口を開けて大きくヴェルノさんは笑い出してしまいました。

ルイスさんも、アイヴィーさんも、幹部の皆さんも肩が震えていらつしゃいます。

見つめていますと未だ笑いの収まらない様子のヴェルノさんが頭の上に手を乗せてグリグリと撫でられます。

痛みはありませんが押し潰されてしまいそうなので、そろそろ離れていたければ嬉しいのですが。

何とか大きな手を退けた私にカラリと笑うのです。

「別に見たけりゃ見れば良い。」

「いいのですか？」

「俺以外の奴について行かねエ限りはな。」

「それは絶対にならないのです。私はこの船以外に乗るつもりも、下りるつもりもありません。」

私の言葉にヴェルノさんは良い心掛けじゃねエかと褒めてくださいました。

船長さんに褒めていただけると、胸の辺りがほんわり温かくなるのです。

ご褒美の代わりに差し出されたリンゴのような果物をしゃくりと齧ればほのかな甘みとサツパリとした味が口の中に広がります。

ヴェルノさんの手から食べるといふ少々お行儀の悪い食べ方ではありませんが、美味しく私が食べさせてもらいましたらペロリとその指を舐めました。

ちょっと悪戯っぽく笑ってそんなことをするものですから妙に気恥ずかしいのです。

…最近恥かしいことが増えた気がします。気のせいでしょうか？

記憶の中を探っていた私の目の前にルイスさんが持って来てくださった沢山の不思議なものがガチャガチャと音を立てながら小山を築きました。

「まったく！イチャ付くのも良いが少しは周りを気にしろよ？」

「悪いな、こつという性分だ。」

触って良いぞと膝から下ろしていただき、許可ももらったので私はさっそく不思議な物の山へと歩み寄ります。

まず気になっていた大きな貝殻で作られたペンダント。薄い貝殻の表面を綺麗に、かつ滑らかに削って一番上にはチェーンがしっかりと通っていました。

閉じていた貝殻を開ければ中には綺麗な押し花が小さな硝子の丸枠の中に納まっているではありませんか。

真っ白ですが光によってキラキラと七色に色を変える貝殻のペンダントは見惚れるほどに素敵なのですが、又イグルミの体では大き過ぎる気がします。

次に手に取ったのは小さな小さなナイフでした。

見た目は丸くて少しぺったんこの細長い楕円形の短刀は本来紙を切ったりするものだそうです。

赤地に金と赤、それから綺麗な青色を使って豪華な仕上がりになってしまいました。気になって刀の刃部分見たかったのですが残念ながら「切れたら危ないわよお。」というアイヴィーさんの言葉で中身まで見ることはできませんでした。

それでも外見がとても色鮮やかでしたので観賞していた私にルイスさんが「それやるよ。」とにこやかに言います。

「え？」

「珍しい物だけど俺には必要ないから、欲しいもんは持ってって良いぞ。」

「…本当にいいのですか？」

「男に二言はねえってな。」

後ろから伸びてきたヴェルノさんの手がぼすんと頭に乗せられます。

さすがヴェルノさんのお兄様、とても優しい方なのでした。

ごそごそと小山を一通り見てから私は短剣と琥珀色の綺麗なペンダントを一ついただきました。

ルイスさんはもっと持って行って良いとおっしゃってくださいましたが、私にはその二つだけで充分でしたので後はお返しすることにします。

あんまり欲がないんだな。などと言われましたが、そんなことは全くございませぬ。

ただお洋服も食事も、何もかも不自由なく与えてもらっているので欲しいものがないのです。

何も困ることなく穏やかに過ごせているだけで幸せ者なのですよ。



いただいた短剣を服の隙間に押し込んでいましたらヴェルノさんがジツとその様子を眺めていることに気が付きます。

「どこに入れたんだ？」

「服の隙間です。」

「…ねエぞ。」

ピラリとスカートの裾を捲って確認する船長さんには流石の私も怒ります。

丸い手でヴェルノさんの顔を叩くとシンと静まり返ってしまいました。

…？

周りを見回してみましたら全員が目を見開いて私を見ています。

何故か少し顔が青いような気がするのは気のせいでしょうか？

ヴェルノさんは顔から私の手を離すと愉快そうに低く笑って、そのまま私を抱き上げてしまいます。

「何しやがる、オラ。」

むぎゅむぎゅと頬を引つ張られたり全身をぎゅぎゅーっと抱き締めてくる船長さんに抗議させていただきます。

「女の子のスカートをめくってはいけないですよ。」

「別に減るもんじゃねエだろうが。」

「気持ち的にはビックリドッキリで寿命が縮んでしまつかもしれません。」

「あ？人形に寿命もクソも無いだろ。」

「……それもそうかもしれませんね……？」

未だペタペタと短剣を探そうとするヴェルノさんの言葉に納得してしまいました。

アイヴィーさんが「納得するところってソコなのお？」と呆れた顔で笑いましたが、私としましてもヌイグルミに寿命なるものがあるのかわかりません。

…あれ、何か話しが逸れてしまった気がするのです。

小首を傾げて見上げましたらヴェルノさんが意地の悪い笑みを浮かべて私にグラスを差し出します。

「飲め。」

未成年者はお酒を飲んではいけないのですよ、ヴェルノさん。

じゅうぶらすさん。(前書き)

軽いキス描写があります。

本当にとっても軽くなので、問題ないかと思われませんが…。

じゅうぶらす さん。

生まれて初めてアルコールというものを私は口にしました。

でも、ヴェルノさんやアイヴィーさんが飲んでいらっしやるお酒はどれも苦味が強く、クセもあってあまり好みではありません。

結局度数の低い果実酒をいただいて何とか切り抜けました。

お酒が喉を通るたびにカツと熱くなり、まだ体の内側がほんのり火照っている気がします。

ヌイグルミなので見た目では分からないかもしれませんが。

それこそ飛び上がってしまいそうなくらい強い度数のお酒を皆さんはまるで水のように飲んでいき、大きな樽が次々と空けられていく光景は驚きです。

私は時々お水が欲しいという船員の方々や幹部の方々へカップをお届けしたり、眠ってしまった方々に毛布をかけたりと細々と働かせていただいています。

ルイスさんの煽るような声に振り向きますと、丁度ヴェルノさんが大きなジョッキのお酒を飲み干しているところでした。

…皆さん急性アルコール中毒に気をつけてくださいね。

一度にお酒の多量摂取は危険なのですよ。

歩み寄れば振り返ったヴェルノさんにヒョイと抱え上げられました。

とつてもお酒臭いのです。

「お水はいりますか？」

「要らねエ。」

「では果物はいかがですか？」

「それもいい。」

はあ…と首下にかかる吐息がお酒のせいも熱くて、ちょっとだけドキリとしてしまいます。

正面に座っているルイスさんは興味深々で見つめてきますが助けてくださらないのですね。

そんなところまで似ているとは流石兄弟なのです。

何とか腕の中で振り返ってヴェルノさんを見やれば金の瞳が何やら不穏な光を湛えて私を見つめていました。

「何か欲しいものはないのですか？」

目を逸らそうとしましたが片手でしっかりと顎を止められてしまい身動きすら取れません。

何とか話題を繋げた私にヴェルノさんはニヤリと笑って言います。

「お前。」

「…ヴェルノさん酔っていらっしやいますね。もうお部屋で休んだ方がよろしいですよ。」

「まだ眠くはねエ。」

「それでもお部屋に行きましょうっ？」

「…分ったよ。」

何か立ち上がってくださったことにホッとしつつも下ろしていただけないことにおや？と思います。

私はまだお手伝いをしたいのですが。

しかしヴェルノさんにそのお願いは即座に却下されてしまい、私は船長室に連行されてしまいました。

ルイスさんの楽しげな笑みと振られた手が少しだけ気に入らなかったのは秘密です。

酔っているにも関わらず暗い廊下を迷うことも、ぶつかることもなくスタスタと歩くヴェルノさんは船長室に付くと着替えもせずベッドへ寝転がってしまいます。

それも私を抱えたままで、です。

ぼふんと一度軽く跳ねましたがベッドは意外にも壊れることなくヴェルノさんの重みを受け止めました。

とっさに閉じてしまいました目を開けると細められた金の瞳と目が合います。

「着替えないといけませんよ。」

「面倒くせエ。」



「せめて巻いてある布だけでも。」

頭に巻かれた布に手を伸ばしてそつと外す私にされるがままの船長さん。

何とか外し終えた布はヴェルノさんの手によってベッドの外へ投げ捨てられてしまいました。

布についた装飾がチャリンと小さく高い音を立てて床にぶつかってしまいます。

壊れないかと心配する私をよそにヴェルノさんはワンピースと合わせで着ていた上着を片手で器用に取ってしまった。

ワンピースだけになった私の体にもふつと顔が埋められます。

「寝ますか？」

「いや、まだ寝ねえ。」

アルコールで普段よりも温かいヴェルノさんの体はとってもぬくぬくしていて心地良いのです。

シーツに散らばっている青い髪が邪魔にならないよう、額から避け

ていましたらお腹の辺りが揺れ出しました。

何が可笑しいのかは分かりませんが笑っているようなのです。

しばらく笑っていたヴェルノさんは私のお腹から顔を上げると、心底愉快そうな表情で私の手を緩く掴み、ぷらぷらと揺らしました。

「…探してみるか？」

唐突な問いに何のことだろうと首を傾げてしまいます。

「お前が人間に戻る方法。」

「…あるのでしょうか？」

「さあな。だが探さなきゃ見つからねエ。」

でも人間の体に戻ってしまったら私は珍しいものではなくなくなってしまつのです。

それではこの船のペットとしていられないのではないのでしょうか？

ジツと金の瞳を見つめていましたら大きな手が私の頭を撫でていきました。

「人間に戻ってしまえば私は珍しくないのですよ。」

「だろうな。」

「そうなたらお別れなのです。」

「あ?」

思ったままに言った私の言葉に何故かヴェルノさんは面食らった様子で顔を上げて、金の瞳を僅かに見開いて私を見下ろします。

私が動く又イグルミだから、珍しい買われたのですから、人間に戻ってしまったらもう普通の女の子なのです。

皆さんの優しさも温かさも知ってしまったのに船を降りなければいけないようになったら、私はすごく悲しくて、きつと泣いてしまおうでしょう。

それでしたら又イグルミでいた方がいいのかも知れません。

ヴェルノさんがズイと顔を近づけたかと思えば、睫毛が触れるのではと思うくらい間近に金の瞳がありました。

唇に柔らかいけれど、ほんの少しカサついた感触が押し付けられていま、す…？

驚きのあまり固まっていた私に「…目くらい閉じれねエのか。」と艶のある掠れた声が囁きます。

「…え、え？」

すぐ眼前にありますウエルノさんの顔をマジマジと見ていましたら喉の奥で低く笑われてしまいました。

「お前は俺が買ったんだ、人形じゃなくともペットにや変わりねエよ。」

人間の体になったら俺としては願ったりだけどなと怪しい言葉を言い、それからもう一度口元に柔らかい感触が触れ合いました。

それでも茫然としていた私に痺れを切らしたのか大きな手で目元を覆い隠されてしまいます。

しばらく何度か感触が触れたり離れたりした後、漸く手が離れて視界が広がりました。

ペロリと唇を舐めたヴェルノさんは「人形のわりに感触は人間と同じだな。」なんて獰猛な光を湛えた瞳に射竦められて穴があつたら入りたい衝動に駆られます。

ですがガツチリホールドされているためそれも叶いません。

何でヴェルノさんがこんなことをしたのか分かりませんが、私としては何よりも嬉しい言葉をいただけたことだけは確かなのです。

「…人間に戻っても、捨てないでくださいね。」

私の言葉にヴェルノさんは優しいキスを額に一つ、落としてくれました。

じゅじゅぶらす よん。

「 …… よお、起きたか。」

目が覚めると目の前に素敵過ぎるニヤリとした笑みがありました。

とりあえず、朝のご挨拶をすると寝起きの掠れた艶っぽい声で「ああ。」と返してくださいます。

そうして頬にキスが一つ。 ……昨夜のことを思い出してしまいました。

お陰様で薄れかけていた羞恥心というものが私の顔を紅くします。

本当にヌイグルミでよかったのです。

これが人間の姿だったとしたらヴェルノさんは嬉々として私に色々な意地悪をしたでしょうから。

そんなことをツラツラと考えながらもやはり恥かしいので、枕に顔

を埋めて唸ってみたり、シーツを手繰り寄せて隠れてみたりと気を紛らわせようと試みてみます。

でもヴェルノさんは私からシーツを引っぺがすと逞しい腕の中へ抱き込んでしまいました。

逃げるどころか身動き一つ満足にできません。

「…これくらいで恥かしがってんじゃねエよ。」

笑いの混じった声がすぐ耳元で囁かれます。

「ヴェルノさんは変態さんなのですか？」

「…ああ？」

だってそうではありませんか。

又イグルミ相手に甘く囁いても困るのです。

私の言葉に呆れたような顔をして、それから抱き締められていた手が外れたかと思えますと、いきなり頬を左右に引っ張られました。

…痛くはないけれどこれは酷いのです。

「んなふざけた事言いやがるのはこの口か。」

いくらヌイグルミとは言えあんまりな仕打ちです。

「そふではないでふか。私は、ふいぐるみヌイグルミ、なんでふよ？ふいぐるみに、きふするなんへ、変れふよ。」

「うるせエ。それ以上グダグダ言うなら口塞ぐぞ。」

「…なにへへな」ひひすか？」

「知りてエか？」

口角をつり上げて笑うヴェルノさんに嫌な予感がして思わず首を振れば、小さな舌打ちをいただきました。

パッと手が離れたので頬の形を両手で押して直します。

ヴェルノさんはすっきりしたのか満足したのか、ベッドから起き上



がって昨日のままだった服を脱ぎ捨てて新しい服へ着替え出しました。

海の男というものは大雑把なのでしょうか？

脱ぎ捨てられた服をきちんと拾って洗濯物専用のかごへ入れるのも私の役目になりそうです。

それからヴェルノさんは自分の机の上から何かを取りました。

「おい、何ボケっとしてんだ。」

洗濯かごの傍で立っていましたらヒョイと持ち上げられてベッドの縁に座らされました。

手に持っていらっしやるのは私のお洋服で、それをもらおうとしたのに、ヴェルノさんは渡してくれません。

それどころかワザと手の届かない少し遠くにお洋服を置いて、私の着ているワンピースに手を伸ばしてくるのです。

「後ろ向けよ。どうせ一人じゃ脱げねエだろ？」

そんなことはないのです。

見た目は小さなヌイグルミですが、幼児ではないのできちんと着替えも出来るのです。

「大丈夫なのです。」

「あ？聞こえねエな。」

「わっ?!」

問答無用で捕まえられると場所を入れ替わるようにヴェルノさんがベッドに腰掛け、私はその膝に座らされます。

ワンピースの小さなボタンに手がかけられて、片手で私を捕まえているというのにとっても器用にボタンを解いていくのです。

ヌイグルミでなければ赤面ものの状態ですな。

ニヤニヤ笑いながら見下ろしてくる黄金色の瞳は愉しげで、こんな風に意地悪をされているのに嫌な気持ちも怒りも湧かないのですから不思議です。

相変わらず色気のない下着にやっぱり「色気がねエ。」なんてぼやかしても困ります。

ヌイグルミに色気というものがあつたら逆に恐ろしいですよ。

手早く着せられたワンピースは先ほどまで着ていたものとは違い、  
キャミソール風のワンピースで色はオレンジから白のグラデーショ  
ンが綺麗です。

裾と胸元辺りに白でお花の刺繍がされていて可愛いお洋服ですね。

耳にはやっぱりワンピースとお揃いのオレンジのシュシュがつけら  
れます。

なんだかワンピースですが若干ドレスのような要素も見受けられる  
のですが…、

「今日は何かあるのでしょうか？」

頭を撫でてくるヴェルノさんを見上げれば軽く瞠目してから、へえ  
と笑います。

「よく分かったな。」

「お洋服がドレスに似ているので、何か御祝いごとか大切なことが  
あるのかと思つたのです。」

「良い線はいつてるが、祝い事じゃあねエよ。海賊達の孤島に今日ダクテイストは行くからだ。」

「だくていすと、ですか？」

人の名前のようにも聞こえますが、どのような場所なのでしょう。聞いてみても「着けば分かる。」としか言ってくれません。

立ち上がって私を机に乗せてからヴェルノさんはトレードマークのようなターバンを巻きます。

ターバンの横一方についている装飾がぶつかり合い、シャラリと耳に心地良い音を奏でました。

自然な動作で抱き上げられてしまいましたが私は歩けないわけではないので、そろそろ歩かせて欲しいのです。

…一緒に歩くとどうしても歩幅の関係で遅くなってしまいますが。

薄暗い通路をスタスタと歩くヴェルノさんの腕の中でそんなことを考えていれば、すぐに食堂に着きました。

いつもならば大勢の船員の方々がいるのですが今日は半分いるかないかくらいしかおりません。

キョロキョロと見回していると大きな手が頭をぼんぼん撫でます。

「大半の奴はまだ寝てるぞ。昨夜はかなり飲んでたからな。」

なるほど。皆さんはまだ夢の中なのですね。

ヴェルノさんに抱えられたまま席に着くと調理場から料理人さんが来て朝食を出してくださいました。

ベーグルサンドなのです。多分ヴェルノさんと私も分を合わせて三つお皿にあります。

手を伸ばそうとしましたがヴェルノさんが先にベーグルサンドをナイフを使って綺麗に切り分けてくださいました。

取りやすいようお皿の端に置かれたそれから小さな一片を取ってパクリと一口。

「…美味しいごはんは幸せなのです。」

「随分安上がりだな、お前の幸せってのは。」

もぐもぐ食べる私にクツクツと笑ってからヴェルノさんもベーグルを食べ始めます。

カリッとした表面と弾力のある食感を食べるのが少々大変ですが、  
とっても美味なのです。

これは明日の朝食にも期待が出来そうなのですよ。

じゅじぶらす。い。

ベーグルを半分ほど食べたところで、隣の席にドカリと誰かが座ります。

横を見ればアイヴィーさんがテーブルに突っ伏していました。

「おはようございます、アイヴィーさん。」

「…おはよう、真白ちゃん。」

腕に顔を埋めているせいか、ややくぐもった声の返事は力がありません。

もしかしなくともこれは二日酔いという状態でしょうか。

私は分かりませんが二日酔いは気持ち悪くなって頭も痛くなるそうですね。

かなり大量にお酒を飲んでいましたヴェルノさんがケロリとしてい

たのですすっかり忘れておりました。

「大丈夫ですか？何か鉄分の多いものを取られるといいのですよ？」

「そうねえ……。」

返事とは裏腹に起き上がったアイヴィーさんは気だるそうにサングラスをかけます。

目が合うとニコリと笑いかけてくださいましたが、ちょっとお疲れ気味なのですよ。

心配なのですがヴェルノさんに顔の向きをお皿へ戻されてしまったので、諦めて今は朝食を食べ切ることに専念することにしました。

時折頬を突付いたり自分のお皿のものをくれたりとヴェルノさんは優しいのですが本当にペット感覚になってしまっているので、人間に戻ったときが少し心配です。

そんなことを考えているうちにテーブルの正面にルイスさんが静かに腰掛けました。

昨夜は幹部の方々と飲み比べていたようですが、やはり何事もなかったかのような様子で料理長さんに大声でご飯を頼んでいます。

アイヴィーさんが恨めしそうに「大声出さないでちょうだい。頭に



響くわあ……。」と片手を額に添えてルイスさんを睨んでいました。それに軽く謝りながら私を見てニヤニヤします。

「何時もそうやって食べてんのか？」

「はい。普通に座るとテーブルに届かないのです。」

「へえ…羨ましいねえ。」

「言つとくが、コレは俺のペットだ。」

「分かってるって。そうカッカすんなよ。」

頭上で交わされる言葉を聞きながら食事をしていれば、アイヴィーさんがジッと私を見つめていることに気が付きます。

小さく「ドレスも可愛いわねえ……。」「なんて聞こえたのは聞かなかったことにしておきましょう。」

せつかくの美味しい料理も、朝では沢山食べられなくて少し残してしまいました。

作ってくださった料理人の皆さんには申し訳ないのですがご馳走様です。

ぽふつと両手を合わせて小さく頭を下げると、それが食事終了の挨拶だと分かっているヴェルノさんが布で口元を拭ってくださいます。……何故でしょうか、ルイスさんやアイヴィーさんなど食堂にいらっしやる方々の穏やかな笑みがすごく気になります。

強過ぎず、かと言って弱過ぎず、適度な力加減で口元を拭いてもらいスッキリしました。

汚れてはいませんがお返しにウエルノさんの口元を、膝に立って拭って差し上げたらとても楽しそうな笑みを浮べて頭を撫でられます。

「ああ、そうだ。今日は海賊達の孤島に行くぞ。」

「そうだな。二人揃ってるし丁度良いかもしれないなあ。」

「だから真白ちゃんがドレス着てるのねえ。納得だわあ。」

何やら訳知り顔で頷くアイヴィーさん。

私はその‘だくていすと’が何なのか知りませんが、皆さんの様子を見ると楽しいところなのでしょう。

ヴェルノさんもルイスさんも、アイヴィーさんも楽しげな表情なのです。

…教えていただけなくてちよっぴり仲間ハズレな気分もしますが。

三人で私には理解不能な会話を繰り広げられてつまらなくなっ  
てしまいました。

仕方ないのでヴェルノさんの膝の上で眠ることにします。

……決して不貞寝ふてねではないのですよ？

「…ん？あ、真白寝ちまつたか？」

話し込んでいるうちにヴェルノの膝の腕で眠りこけてしまっている  
又イグルミを見てルイスが苦笑する。

ふわふわの真っ白なそれを日焼けしたヴェルノの大きな手がゆっく  
りと撫でた。

もう片手は柔らかかそうな背中に添えられ、膝から落ちないように留  
めている。

自分と同じ黄金色の鋭い瞳が優しく細められているのをルイスはど  
こか遠くのことのように眺めていた。

前回の時には二人で軍艦を一隻襲撃したが、その時には絶対になか  
ったであるう弟の穏やかな表情に何とも言えない気持ちになる。

「コイツには海賊達の孤島の事は教えてねエからな。暇だったんだ  
る。」

「あら、教えなくて良いのお？真白ちゃんみたいな子がウロウロし  
てたら、それこそ直ぐに捕まえられて売り飛ばされちゃうんじゃないな

いかしら？」

海賊達の孤島はその名の通り、海で生きる海賊たちだけが訪れることを許される場所だ。

つまり無法地帯である。

そこで盗みや喧嘩、殺しなど、何があっても、それらは自己責任となるため腕に覚えのある者でなければ好んで行くことはないくらいである。

真白のように物珍しい生き物が一人でウロついていれば、それこそ捕まえてくださいと言わんばかりの状態だろう。

狼の群れに子羊を投げ入れるようなものだ。

が、それは力無い者の場合である。

「俺がそれを許すと思ってるのか？」

「まさか！アタシだって真白ちゃんを他の奴らに渡す気なんてないわ〜。」

「なら気にする事じゃねエだろ。」

ヴェルノとアイヴィーの会話を聞いていたルイスが笑う。

「お前ら本当に真白の事、気に入ってるんだな。」

特に気紛れで飽きやすい性格のヴェルノがここまで一つの物に執着を見せるのは珍しい。

確かに眠っているこのヌイグルミは世界に二つとない珍獣であるうし、どう見ても触っても柔らかかな体は高級な布や動物の毛を惜しみなく使っているだろう。

だがこれほど気に入るなんて、恐らく初めてだ。

ルイスの言葉にヴェルノが低く笑う。

「ああ、気に入ってるぜ。コイツは俺を退屈させねエし、無駄に苛立たせねエ。そこらの娼船の女よりマシだ。」

上機嫌と分かる声音に嘘はなさそうだ。

よく分からない唸りを上げながら丸くなるヌイグルミをヴェルノは

抱え直して立ち上がる。

「後で部屋に來いよ。航路の確認くらい必要だろ。」

「ああ、分かった。」

真っ白なヌイグルミを抱えて食堂を出て行く弟の後ろ姿を見送って  
から、ようやく来た料理にルイスも舌鼓を打った。

じゅっぶらするく。

温かな感触がゆっくりと背中を撫でて行きます。

優しく、包み込むような温かさはとても心地が良いのです。

もっと眠っていたい気持ちを押し目を開けますと、目の前には布が広がっていました。

潮の匂いのするそれから顔を離せば見慣れた黄金色の瞳が私を見下ろしています。

「おはようございます、ヴェルノさん。」

「やっと起きたか。もう着くぞ。」

着く、とは一体どこなのでしょう？

…あ、海賊達の孤島という場所なのでしょう？



ヴェルノさんは甲板にいたようで風がぶわりと吹き付けてきます。

真っ青な空にヴェルノさんの青い髪が不思議と映えて見えて、思わず見惚れてしまいかけたのは内緒にしておきましょう。

風で飛ばされないよう服を掴ませていただきますと大きな手がしっかり支えてくださいます。

温か過ぎてまた眠ってしまいそうになる私を見てニヤリと笑い、頬を抓られてしまいました。

「もう着くって言うてんだろ。寝るな。」

「ヴェルノさんが温かすぎるのがいけないのですよ。」

「おーい、イチャつくんなら部屋でやれよ。」

ルイスさんが苦笑交じりにそう言いながらヴェルノさんの隣りに並びます。

こうして揃っているところを見ますと、本当にご兄弟なのだなぁと思えるくらいよく似ていらっしやいます。

横から伸びてきたルイスさんの手がワシワシと頭を撫でてきます。痛くはないですが視界がブレるのもう少しお手柔らかにお願いし

たいのです。

そこでふと船が向かっている先に島のようなものが見えました。

ルイスさんの手を両手でガードしながらヴェルノさんを見上げます。

「あれが海賊達の孤島なのですか？」

「そうだ。船から下りたら、俺から離れんじゃねエぞ。」

「？」

「お前みたいなのは捕まって売り飛ばされんのがオチだ。」

そんなに危険な場所なのですか。

思わず手から力が抜けてしまい、ルイスさんの手が顔に落ちてきてしまいました。

もしも漫画のように背景が描けるのでしたらきつと私の後ろには雷が落ちていていることと思います。

もちろん、ヴェルノさんを信用していない訳ではありません。

ですが前置きもなくそのように危険な場所へ行くとなると心の準備といえますか、色々と準備をせねばならないのです。

ルイスさんからもらった短剣はすっかり服の中に隠してありますので何かあった際にはそれで対処することとしましょう。

それでも出来る限りヴェルノさんから離れないようにするのが一番なのですね。

段々と近付いて来る島を見ながら、一応服を握らせてもらおう約束もしておきました。

いつもと違い今日はきちんと自分の足で歩くようにとアイヴィーさんから言われます。…普段から歩きたいのですが、皆さんがすぐに抱っこしてしまうのが良くないのですよ。

なんて心の中で言ってみます。

このドキドキが治まらなくてヌイグルミの身の上なのに口から心臓が飛び出てくるのではと冷や冷やしてしまいます。

島だと思っていた海賊達の孤島はかなり近くまで行って漸くそれが船なのだと気付きました。

いくつもの大きな船を繋ぎ合わせて作られています、その周りにまた様々な旗を掲げた船がくっついていきます。

「罫體ばかり…もしかして全部海賊船なのですか？」

「そうよお。よく見てるのね真白ちゃん！偉いわぁ。」

よしよしとアイヴィーさんが頭を撫でてくださいます。

それでも胸のドキドキは治まりません。緊張と興奮で少々おかしくなってしまうようなのです。

「ヴェルノさん、ヴェルノさんっ。ドキドキしてますっ。このまま上陸したら緊張のあまり気絶してしまうかもしれないっ。」

少しでもこの気持ちをお伝えしたくてそう言ったのですが何故だかヴェルノさんは笑ってらっしゃいます。

オマケに手の平を胸元に当てて、わざわざ心音を確認めようとするのです。

その手を叩きましたら「心音なんか感じねえな。」と悪戯っ子のように意地の悪い笑みを浮かべました。

けれど大きな手が背を軽く叩いてくださりました。

そんな些細なことで私の心臓のうるさは少しだけ落ち着いてしまっているからヴェルノさんはすごいのです。

そろそろ島に着くからと床に下ろされましたがヴェルノさんの服の

ヒラヒラとした裾部分を掴ませてもらいます。

まだ着いてないと笑っていましたが私の心の安寧のためにはもう必要なですよ。

ガタンと船が揺れたかと思うと船員の方々が数人がかりで錨を下ろします。それから何やら縄を投げて、下にいる方が傍にあった杭が何かにしっかり縄を縛り付けます。

そうして縄梯子が下ろされるとアイヴィーさんが素早く船から下りました。

ヴェルノさんに抱えてもらおうかとも思いましたが何事も挑戦してみなければ分かりませんので、私も頑張って縄梯子を降りて行きます。

下では先に下りたヴェルノさんとアイヴィーさんがいて、上を見ますとルイスさんや船員の方々が心配そうに見下ろしています。

意気込んで縄梯子に手をかけましたが、想像よりも高く、とても滑るので怖いのです。

そつと足を伸ばしましたが下の梯子がずれて足が滑ってしまいました。

あ、落ちますね。

腕だけで体重を支えられるほど筋肉もないので私の柔らかな体が梯子から落ちます。

さすがにこの高さからでは痛いのでは、と思いましたが下にいらっしやいましたヴェルノさんがキャッチしてくださいました。

まさに危機一髪なのです。

「ありがとうございます。ナイスタイミングでさすがなのです。」

「お前にもう梯子は使わせねえ。」

「そうですね。その方がいいと私も思いました。」

地面に下ろしてもらい、乱れたスカートを整えていますと下りてきたルイスさんが呆れた顔で私を見下ろします。

目が離せないとおっしゃってました。それは危なっかしいと言いたいのでしょうか？

確かに先ほどのことは危険でしたが常日頃から危険に突っ込んで行く訳ではないのですよ。

結局船から下りたのは幹部のヴェルノさん、アイヴィーさん、幹部の方々、ルイスさん：それから買出し組の方々だけでした。

そういえばお野菜などは新鮮でしたが一体どうやって鮮度を保っていらしたのでしょうか？

後ほどヴェルノさんに聞いてみようと思います。

じゅうぶらす なな。

海賊達の孤島は想像していたよりも戦場と化しておりました。

普通にお店などがありまして船の上ということを忘れてしまいそうな場所でしたが、そこかしこに強面のいかにもな方々がたむろっていらっしやいます。

確かにこんな所でヴェルノさんから離れては私は売り飛ばされる運命でしょう。

絶対に離さないよう服をしっかりと掴んでヴェルノさんを見上げれば随分悪い笑みを浮べておりました。

何やら良からぬことを考えているようにしか見えません。

私のことを気遣ってかゆったりとした歩調で歩き出したヴェルノさんに私は少し早足で着いて行きます。

ヴェルノさんの横にアイヴィーさんとルイスさんが、私の後ろには幹部の方々が並びます。

後ろから何となくですが背中に視線が刺さります。でもきつと、も



つと奥へ行つてしまえばより視線が多くなることでしょう。

船と船とを繋ぐ大きな道を渡つてお店が佇む場所へ入りましたら一気に人が増えました。

ヴェルノさんはお店を冷やかしながらのんびりしていらつしやいます。

時折私を抱き上げてお店に並ぶ品を見せてくださいますが、ヴェルノさんは大抵お店の方に私を売ってくれないか、どこで手に入れたのかと質問されては愉しげな笑みを返しておられました。

「あの、どこへ行くのですか？」

お店を見て回るのも楽しいのですが今日の目的が全く分からないのです。

「特にはねエよ。」

「ないのですか？」

「ああ、たまに顔出さねエと死んだと思われからな。他の奴らの顔も見えおきてエし。」

なるほど。各々の生存確認も兼ねているんですね。

少々スリルのある島ですが、海賊なのですからいつまでも尻込みしては舐められてしまいます。

私も毅然とした態度で歩かなければ。…でもやっぱりヴェルノさんのお洋服は掴ませて欲しいのです。

沢山のお店を抜けていけば今度は食事処がズラリと並んでおりました。

色々なところから騒ぎ声が聞こえてきたり、開けっ放しの出入り口から時折コップが飛び出してきます。

その中を何てことない風にゆったり歩くヴェルノさんはカッコイイのです。

さすが船長さん。飛んでくる物もあっさり交わしておられます。

などと見ていましたら突然ヴェルノさんが立ち止まりました。

キョロキョロしていた私はお恥かしいことながら、その足に思い切り突っ込んでしまい、後ろにいた幹部の方々が噴出しています。

アイヴィーさんもクスクス笑い、ヴェルノさんに至っては気を付けるとやや呆れた様子です。

何故立ち止まったのでしょうか？

足の横から前を見ようとした瞬間、ものすごい轟音がして目の前に何か飛び出していらっしやいました。

お店の壁だろう。木板や木片もご一緒しています。

かなりの勢いで道に飛んできたはずなのにそれは起き上がりました。

「おー、痛ってえなあ。もちっと優しくしてくれよあ。」

しかも盛大に口を開けてがははははと笑っています。

…体は何ともないのでしょうか？

「よお、相変わらずじゃねえか。」

ヴェルノさんがそう声をかけましたら、その方が勢い良く振り返ります。

あんまり勢いが良すぎて怖かったのは秘密です。

「おお、ヴェルノ！生きてたかあ！！」

「ハッ、そう死ぬかよ。」

「アンタも元気そうねえ。この店の壁ぶち破ったのは今日で何回目？」

「んなモン忘れちまったあ！」

大柄な体格に似合った豪快な方のようです。

ジッと見ていましたらバツチリ視線が合ってしまった。

慌てて足の後ろに隠れようとしたが、ヴェルノさんに捕まえられて抱き上げられてしまいました。

これでは逃げることも隠れることもできません。

「おお？！何だコイツあ！生きてんのか？！」

ズズズイーっと顔を寄せられて思わずヴェルノさんの服に顔を押し付けて避けてしまいました。

すぐく人見知りという訳ではありませんが海賊の方々は何かこう何とも言えないオーラーを持っているので、あまりお近づきになりたくないのです。

もちろんヴェルノさんやアイヴィーさんなど私がお世話になっている船の方々は別ですが。

頬を突付かれていますますが顔を上げる勇気が出てきません。

…うう、このままスルーしていただけないでしょうか。

そんな私の考えを読んだようにヴェルノさんが苦笑しました。その振動が布越しに伝わってきます。

「ああ、俺のペットだ。まあお前は嫌われたみてエだがな。」

「ありゃ、そうか、そりゃ残念だ。でも良いなあ、こんな変わったモン聞いた事もない。」

「悪いがコイツはやれねエ。」

「がはははっ、だと思った!」

ポンポンと頭を撫でられる感覚がしてから、手が離れていく気配がした。

そーつと振り返ると健康そうな褐色の肌の大柄な人とまた目が合っ  
てしまいます。

やっぱりずっと合わせられなくて逸らしてしまいました。

残念がってくださいっではいしましたが、今の私にはあなたのような方  
々は大き過ぎて少々怖いのです。

それから一言二言話してヴェルノさんはその方と分かれてしまいま  
した。

下ろされてしまうのではと思いましたが、背中をゆっくり撫でてく  
ださる手からして私は下ろされなくて済みそうなのです。

海賊達の孤島はちよっぴり恐ろしい場所なのです。

「…ここは怖い場所なのです。」

「そりゃ海賊だらけだからな。」

「そうではないのです。大きい方々も沢山いらっしやいますし、も  
しも逸れて踏み潰されたり蹴り飛ばされたらと思うとドキドキスリ  
ル満点で私の心臓は爆発寸前なのですよ。」

「お前そんな事考えてたのか？」

「？ 何かおかしいですか？」

でも怖いので抱っこしててください。

そう甘えてみましたら笑って、手のかかるヤツだと抱え直してくださいました。

ヴェルノさんの船にいる方々はさほど大柄な人もいません。ダイヴィさんは少々大柄ですが、大男という程でもありませんし。

そこらじゅうにいる大柄の人に蹴られ、潰されしては綿と布でできたヌイグルミの私なんてあつと言う間にボロボロなのです。

女の子として綺麗にしておきたいのもそうなのですが、何かあつてはヴェルノさんにご迷惑もかけてしまいますから。

…今日一日は大人しくしているべきなのでしょう。

探検は諦めるしかありませんね。

じゅうぶらす はち。

胸元にしっかりとくっついて離れないヌイグルミを片手で抱えながら、ヴェルノは海賊達の孤島の奥へ歩いて行く。

先ほど出会った古い知人ともう暫く話をするのも一興だったが真白が知人へ怯えるような仕草をしたので、手短に済ませて分かれた。

最初は海賊が怖いのかとも思ったが、どうやらそうではないらしく、大柄な男はヌイグルミにとって少々恐怖を煽られるらしい。

小さなヌイグルミからすれば自分達でさえ大きく見えるのだから更に大きな男を怖がるのも無理はない。

海賊だから怖がっている訳ではない。という所も面白い。

普通は海賊だと知ると大抵泣き叫んだり逃げ惑うものだ。

だがこのヌイグルミは逃げるところか他の者を見たら自分の下へ寄ってくる。

自分こそが海賊だというのに変わった女だ。

抱えられて安心したのか立ち並ぶ酒場や娼館を物珍しそうに眺めて



いる。元々大きな赤い目が更に大きく見えて、そのうち零れ落ちてしまっんじゃないかと内心噴出しそうになりながらヌイグルミの様子を眺めていた。

「ヴェルノさん、ヴェルノさんっ。」

何時ものんびりとした口調よりも、やや興奮で上ずった幼さの残るソプラノの声が名を呼んでくる。

「何だ。」

「あの人ナイスバディですよ。どうやったらあんな素晴らしい体になれるのでしょうか?」

丸い手が示す方には鮮やかな赤のドレスを纏った魅惑的な女がいた。娼婦だろう。

紅い口紅が実に扇情的だがあれを見て興奮しているのだからやはりこのヌイグルミは変わっている。

「さあな。」

「そうですね…。あんな大人な雰囲気漂う女性に私もなりたいのです。」

そりゃ無理だろう。口から出かけた言葉を何となく飲み込んだ。

キラキラと輝く赤い目にそんなことを言えば、気落ちするのが目に見えている。

全くこの又イグルミはコロコロと表情を変えて飽きさせないのだから不思議な生き物だ。

中身は女だろうに、男の腕の中でフーフー楽しげにはしゃいでいる辺り、まだ男女の仲なんてものとは無縁なのだろう。

セシルの買ってきた串肉を喜んで食べていたが、食べ終わった後にウサギの肉だと聞かされて衝撃を受けていた。

小さな「共食い…！」という言葉を拾ってしまった時は流石のヴェルノも笑いが漏れた。

又イグルミのウサギなのだから別に共食いにはならないだろう。

海賊らしくない、この柔らかな空気を案外気に入っていた。

商船や別の海賊船を襲う時の楽しさと、又イグルミと戯れる楽しさは根本的に何かが違うのだ。だが、それが何なのか分からないほど

ヴェルノも子どもではない。

…まさかこの俺が、な。

腕の中のヌイグルミを見下ろせば、赤い瞳がきょとんと見つめ返してくる。

「どうかしましたか？」

「いや、何でもねエよ。」

「そうですね？あ、帰りにお皿とかフォークとか買いたいです。今のままだと大きいので。」

「あ？いらねエだろ。」

「いります、とっても必要なのですよ。あの大きいお皿のままでは、いつか私のお腹がはち切れてしまうのです。」

ぺちぺちと叩いてくる丸い腕が抗議する。

痛くも痒くもないが、全く以って新鮮な反応だ。

仕方ねエなと言うと嬉しそうに笑って礼を述べてくるヌイグルミは、媚びたりしない。

まあ、甘えたりはするが今まで抱いてきた娼婦達に比べれば可愛いものだ。

大量の服をせがむ事もない、食事にも文句は言わない、言われた事はしっかりこなす。けれど自分の言いたい事はハッキリ言う。

少々抜けているところはあるが幼さと相まって愛嬌にしか思えない。

子どもと大人の間のようなヌイグルミだ。

「ふーん、ふーん、ふーん。かけっこ、かけっこ、捕まったら負け負け。捕まえたなら勝ちよ。海賊ルールで負けたら没収、勝ったら強奪、弱肉強食、海賊の世っ界」

目の前を駆けていった数人の海賊達を見て、どこか調子つ外れな歌を歌い出す。

穏やかで間延びした歌の内容にアイヴィーが若干口元を引きつらせる。

「ねえ、真白ちゃん。その歌、今考えたのかしら？」

「はい、そうですよー。海賊の世界はとてモワイルドなのです。」

あれは狩られる側と狩る側の命をかけた鬼ごっこではあるが、真白が歌うと妙に間の抜けた感じがする。

が、本人は気に入ったようで、また続きを考えるように鼻唄を歌い始めた。

それに合わせて白い体が揺れてリズムを刻んでいるのだが恐らく無意識なのだろう。

その後も道端で起こる喧嘩を見て歌ったり、途中立ち寄った娼館の女達を見て綺麗綺麗と歌って大層喜ばれたり、ある意味満喫しているようだった。

「次はどこに行くんですか？」

娼婦から貰った棒付きの飴を食べながらヌイグルミが聞いてくる。

喋るたびにモゴモゴと口の辺りから生えている棒が動いた。

最近では随分見慣れたその光景に視線を落としつつ、答える。

「海賊達の孤島のお頭さ。」

「お頭さん？ですか？」

「本当に会いてエのは違うが、居るか分からねエしな。」

この島を束ねる男の所には一人の老婆がいる。

ソイツはだいぶ歳のいったヤツだが先視師さきみしと呼ばれる、世界でも数少ない特殊な力を持つ老婆だ。

客の望みを聞き、そうしてその望みを叶えるためのきっかけや必要な物を教えてくれる。

勿論望みが叶うか叶わないかは、その後の客自身の努力や選択によって異なるが。

とりあえずどうすりゃこのヌイグルミが人間になるか、だ。

自分だって何時までものんびり腰を据えて待つつもりはない。

ヴェルノのそんな考えなど欠片も気付いた様子もなく、真白は腕の中で辺りを見回している。

「おい、少しは落ち着け。」

「あ、はい。」

軽く注意すれば視線を巡らすのをやめて腕の中で静かになる。

従順過ぎる女はつまらないが、気の強過ぎる女はうざりたい。

これくらいの女が一番丁度良いのだ。

楽しみに口元に弧を描いて歩くヴェルノの姿にアイヴィーと幹部達は顔を見合わせて苦笑した。

気付かないのは何時だって本人ましろばかり。

じゅうぶらすきゅう。

海賊達の孤島の中央にありましたのは、エジプトなどのアラビアンな雰囲気漂う大きなテントの建物でした。

サーカスの建物にも似ていますがそれほど大きくないのです。

けれど風でテントの裾がヒラヒラと揺らいでとても涼しそうなのですね。

ヴェルノさんのターバンと言い海賊の方々の間ではアラビアンが流っているのでしょうか？

あ、でもターバンを巻いているのはヴェルノさんだけなのです。歩く度に布の片側についた装飾がシャラリと音を立ててお洒落なのですよ。

私も一度で良いのでターバンを巻いてみたいと思います。

テントの前では筋骨隆々な男の人たちがナイフやらを持って物騒なのです。

けれどヴェルノさんの顔を見ましたら不思議なくらいアッサリ道を



譲ってくださいました。

さすがなのです。海賊船長というのは凄いことなのですな。

幾重にも垂れていたカーテンのような布を持ち上げてテントの中へ入りますと予想よりも涼しく、快適な温度が保たれているのです。

暑いエジプトなどの地方で使われている理由がよく分かります。

ちなみに幹部の方々はテントの外で待つようで、私とヴェルノさんしか入れませんでした。

中もアラビアンテイストに統一されていて、壁には不思議な模様のパペストリーが、床にも同じ模様の絨毯が敷かれています。

…とても触り心地が良さそうなのですが残念なことにヴェルノさんは私を下ろしてくださいません。

室内の中央にはテーブルとソファが置かれています。

一人掛けのソファには随分細身の男の人が座っています。

「久しぶりだな、ウエルダン。」

ヴェルノさんが軽く手を振りながら近付きますと、本を読んでいらしたウエルダンさんという方が顔を上げました。

少し病的なくらいに細いその方はダークグレーの髪に群青色の瞳をして、真っ白な肌と白いワイシャツの色はさほど変わりなく見えます。

やや神経質そうな顔には細身の眼鏡がかけられていました。

「…ヴェルノ？久しぶりじゃないか。元気そうで何よりだよ。」

けれど見た目よりも穏やかな声と口調でソファから立ち上がりました。

ヴェルノさんと握手を交わして、私を見ます。

群青色の瞳があんまりジツと見つめてくるのでとても居心地が悪いのですよ。

「君はこんなものを持ち歩くような趣味だったかな？」

「冗談は止せ。コイツは俺のペットだ。」

「ペット？？」

カチャリと眼鏡のフレームを持ち上げてズレを直すウエルダンさん。ソファーに座ったヴェルノさんは同じく座ったウエルダンさんの目の前のテーブルに私を下ろします。

やっと下りられたのは嬉しいのですがテーブルの上はいただけないのです。

それでもきちんと挨拶をしなければいけないですね。

「真白といいます。ヴェルノさんに助けていただきました。」

「…これはご丁寧に、僕はウエルディーノ＝ダンガルド。ウエルダンで良い。」

「はい、ウエルダンさんですね。」

「にしても驚いた。こんな生き物見たことも聞いたこともない。」

ヒョイと持ち上げられて耳の付け根や顔を凝視されます。

そんなに見つめられてもこのヌイグルミの体に糸や紐などはないのですよ。私自身の体なのですから。

心行くまで見た後、そっとテーブルに戻してくださいました。です

が私は絨毯やタペストリーがとても気になるのです。

テーブルから下りようと思いましたらヴェルノさんに捕まえられてしまいます。

「おい、どこ行く気だ。」

「絨毯やタペストリーを見たいのですっ。」

「ああ、それならゆっくり見ると良い。壊さないよう注意してくれるなら、だけれど。」

「気を付けますです！」

もちろん、ヴェルノさんから見える場所にいますよ。

柔らかな絨毯に下ろしてもらい、まずは足元の絨毯を手で軽く撫でてみました。綺麗に掃除がされているらしく毛玉のない滑らかな感触がします。

壁にあるタペストリーなども様々な模様が色鮮やかで素敵なのです。ヴェルノさんとウエルダンさんがお話をしている間、私はいくつもあるタペストリーと絨毯を見学させていただきました。

とても満足な気持ちでソファアに戻りますと何やらお二人は真剣な

顔で何か難しいことを話し合っておりまして。

邪魔になってはいけませんのでそっとテーブルに寄ったのですが、すぐに気付いたウエルダンさんが楽しそうな笑い声を上げて私を見ます。

「ふふふつ、そんなに気にせず好きなようにすると良いよ。ウエルノが連れて来たのなら、君は僕の大切なお客だからね。」

「あんまり甘やかすんじゃないよ。」

「ああ、すまない。つい、ね。可愛らしい外見だと、どうしても甘やかしてしまいたくなるじゃないか。」

とりあえずウエルノさんのお隣に座らせてもらいます。

ウエルダンさんがどうぞとクッキーを勧めてくださいましたので、ウエルノさんを見上げましたら軽く頭を撫でられました。

どうやら食べてもいいようです。シンプルなジンジャークッキーはサクサクと軽い音と、歯ごたえがよく、口の中に広がる生姜の香りはホツとします。

喉が渴いたなと思っていましたらウエルノさんがグラスをくださいました。

飲んでみたら普通のお水でした。お酒ではなくて良かったのです。

そんな風にクッキーを食べていたときにテントの入り口から誰かが入ってきて、顔を上げたウエルダンさんが手を振ります。

「丁度良いところに戻ってきた。…すまない、ちょっとこっちへ来てくれないか。」

振り返ると初老のおばあさんが真っ黒な布を頭から被って顔を隠していました。

日焼けから肌を守るためか、暑さ対策なのかは分かりませんがミステリアスな雰囲気があります。

おばあさんとは言え真っ直ぐに伸びた背筋が綺麗な方で、傍まで来ると顔の布を少しだけ外してヴェルノさんと私を見ました。

「来ると思っていましたよ。」

「え？」

「人の姿になりたいのでしょうか？こんな婆ばばだけれど頼ってくれて嬉しいわ。」

物腰穩やかなおばあさんの言葉に思わず、マジマジと見つめ返してしまいました。

「お前は向こうでソイツと話して来い。」

おばあさんに押し付けるように手渡されてしまいます。おばあさんは心得た様子で私をしっかりと抱えると、テントの更に奥の小さな部屋へ行きます。

ヴェルノさんと離れて少々不安はありますが、おばあさんは悪い人には見えないし、ヴェルノさんが言うのですからきっと大丈夫なのだと思えます。

水晶玉の乗ったテーブルの上に下ろしていただき、おばあさんも前の椅子に腰掛けます。

頭から布を取ったおばあさんは随分若く見えます。淡い紫の髪が緩くウェーブを描いていて人の良さそうな方でした。





「うん。」

「貴女、随分不思議な体験をしているのね。」

ゆっくりとした口調で、けれど労わるような言葉に思わず頷いてしまいます。

おばあさんは一度私を上から下まで見つめました。そうして、ヌイグルミは随分窮屈ではないかしらと苦笑いを浮かべました。

どうして見ただけで私がただのヌイグルミではないのだと分かったのでしょうか？

水晶を撫でながらおばあさんは朗らかに笑います。

「一週間程前に偶然水晶に貴女が映ったのよ？それに私の目は物の本質が見えるから、貴女の本当の姿もそのヌイグルミに透けて見えるわ。」

「あの、なら、人間の姿に戻る方法はあるのでしょうか？」

ついカんで前のめりになってしまった私を見ておばあさんは頷いてくださいました。

それだけで私の心には希望が湧きます。

「あるわ。」

「本当ですか?!」

「ええ、それに心配しなくても貴女の大好きな船長さんと一緒にいれば、自ずと見つかるわ。」

「そうなのですか?」

それは何てすごいことでしょう。

ヴェルノさんは本当にすごい方なのかもしれません。

でも、大好きというのは照れるのです。確かにヴェルノさんのことは大好きなのですが、皆さんのことも大好きなのですよ。

おばあさんが早く見つかるよう、おまじないをかけた小さな花のブ

ローチを一つくださいました。

花卉が何十にも重なって見て見た事もないお花でしたが、可愛く素敵なデザインに嬉しくなります。

それを服の胸元につけると身体の中から元気が出てくるような気がしました。

けれど人の姿に戻るのがどんな方法なのかは教えていただけないそうです。

結果はそこに辿り着くまでの過程の苦労が大事なのだそうで、簡単に分かってしまっただけでは意味がないようなのです。

何事にもツライことや苦しいことはあつて、それを知らずに結果を得ても、私のためにはならないのだそうです。

言葉は難しかったですが私のことを考えてくださっていることはよく分かりました。

私も自分のことですのでやはり多少なりとも努力したいと思います。なので、方法があると分かっただけで十分です。

おばあさんとお話をしていましたら布を持ち上げてヴェルノさんが顔を出してきました。

「話しは済んだか？戻るぞ。」

「あ、はい。…おばあさん、今日はありがとうございました。私が  
んばってみます!」

とても素敵なブローチもいただきましたし、今の私はやる気も元気  
も百パーセントなのですよ。

おばあさんはニッコリ笑って送り出してくださいました。

ウェルダンさんはお仕事が入ってしまったらしくヴェルノさんと共  
にテントを出るときにはいらっしやいませんでした。

お礼を言いたかったのですがお仕事では仕方ありませんね。

今度会う機会にきちんとお礼を言いたいと思います。

「買い物行くぞ。」

「買い物ですか?」

「食器を買ったんだろうが。言い出したお前が忘れてんじゃねえよ、  
馬鹿。」

そういえばそうなのでした。

おばあさんと会ってお話を聞いて、ついつい忘れてしまいました。

そこでふとヴェルノさんに報告しなければいけないことに気が付きます。

「ヴェルノさん、ヴェルノさん。」

「あ？」

「私、人の姿に戻るそうですよ。それもヴェルノさんと一緒にいると見つかるかと教えていただきました。」

「そうか。なら思ったよりも時間はかかんねエかもな。」

「そうだと、とても良いのです！」

頭の上に乗るヴェルノさんの手に撫でてもらいながら、私はへらりと笑ってしまいました。

きつととても間抜けな笑顔だったでしょう。でも良いのです。

皆さんとまだまだ一緒にいられるのですから嬉しくないはずがありません。

早く人の姿に戻る方法が見つかって、元に戻れたら、皆さんのお手伝いを沢山したいのです。

甲板のデッキがけも、調理場のお手伝いも、見張り台に上ったり自分でドアを開けたり、したいことはいっぱいあるのです。

「あら、真白ちゃん。良いことでもあったのかしら？ 凄く嬉しそうよお？」

「分かりますか？」

外で待つていてくださったアイヴィーさんが頬を突付いてきます。

そんなに私は分かりやすいのでしょうか？

「なんだか嬉しそうな雰囲気でしたわ。」

羨ましいわね！と笑うアイヴィーさんも楽しげで嬉しそうなのです。

ヴェルノさんがいて、アイヴィーさんがいて、幹部の方々がいて、船員の方々がいて。私はやはりヴェルノさんの船にいられて幸せ者なのですな。

皆さんのために出来ることは少ないかもしれませんが私もこれから色々頑張りたいと思います。

「新しい食器を買ってもらえるのですよ。」

「ああ、普通の食器でも真白ちゃんには大き過ぎるものね。」

「はい。できれば可愛いお皿が欲しいのです。」

「ならアタシの行きつけのお店に行きましょう！とっても可愛い小物とか色々あるのよぉ〜！」

アイヴィーさんを先頭に歩き出します。私はまた抱っこしていただいています。

上を見上げればヴェルノさんが丁度見下ろしていました。

空よりも淡く海よりも深い青い髪と黄金色の瞳は何度見ても綺麗な色で、空に映えて素敵なのです。

…食器も青色か黄色系の色で統一しようかと思っています。





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6449t/>

---

Jolly Rogerに杯を掲げよ

2011年9月20日18時47分発行